

琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査*

金 関 丈 夫*¹ 国 分 直 一*²
多 和 田 真 淳*³ 永 井 昌 文*⁴

Archaeological Survey at the Shimotabaru Site in the Island of Hateruma, Ryukyu, in 1954

By

Takeo KANASEKI, Naoichi KOKUBU, Shnijun TAWADA and Masafumi NAGAI

In 1954 the late Mr. K. YANAGITA formed a "Research team for investigating the Ryukyu culture" which made possible our archeological survey of the southern Ryukyus. Field works were carried out in the islands of Hateruma, Ishigaki, Taketomi and the main island of Okinawa. However, we spent as long as 20 days in working on the Hateruma island, where so far no full-scale scientific surveys had been made. This is a report of the field work we made there. After a careful general survey we discovered a prehistoric shell mound in Shimotabaru of northern coastal district of this island. The excavation work was concentrated into a two-week period from March 22 to April 5, 1954.

Three rectangular trenches measuring 2m by 6m, which were opened on the site, revealed that only a single cultural stratum was deposited. Finds collected consist of potsherds, stone implements including axes, adzes, needles and flat pebbles with polished faces, and shell objects, molluscan shells and animal bones. From the type and fabric of the sherds it may be concluded that the pottery from the Shimotabaru site seems to have some close affinities with the "panari" type pottery of Yaeyama. All the stone axes and adzes unearthed illustrate the technique of constructing of pre-quadrangular stone objects. With regard to their cross section, the most common shape is elliptical in the middle. Another type of implement had a roughly trapezoidal cross section. Though the step in Shimotabaru is not so well developed as those in Luzon, South China and Formosa, an attempt to produce

* 水産大学校研究業績 第426号 昭和39年6月13日受理
Contribution from the Shimonoseki University of Fisheries, No. 426
Received June 13, 1964

*1 帝塚山大学

*2 水産大学校

*3 琉球政府文化財保護委員会

*4 九州大学医学部

a stepped butt can be found in association with irregular elliptical cross section. In some cases, the back of oval or transitional axe-adze type is reduced to a narrow ridge with a triangular cross section. These can be compared with sections which have a resemblance in type to both beaked adze in Malay and pick adze in Indonesia. And there were found some elaborate implements with hog back, which can be paralleled with the "hog-backed" adze of Polynesia. Both shell ring and shell blade made of the lid of *Turbo marmoratus* can be compared with those found from the Itanasai island and from the sites of southern Formosa. It is worth noticing that the present-day Yaeyama hoe locally called "bira" has a very similarly-typed iron blade to elongated stone implements with elliptical section pertaining to cutting edge.

I 波照間島の位置、地形及び調査の目的

波照間島は竹富町西表島の南西海上に位置する小島である。琉球列島の最南端に位置し、緯度からいうなら台湾本島の花蓮港とほぼ同線上にあり、秋季の晴れた日には台湾北東岸が望見されるという。石垣から発動機船で5時間を要する。島の面積は1300ヘクタール。島形はほぼ東西を長軸とする長卵形を示している。

(Pl. I)

島は青色粘土層を基盤とする隆起石灰岩から成っている。島は北方に傾動している。その上、島の中央をほぼ東から西に貫く大断層があるため、北側に湧水があるが、南側には湧水がない。北側には湧水のみでなく船着に都合のよい砂浜を形成する海岸線もあるが、南側は切り立った断崖をなしている。全般的にいて高地なく、最高地点をなすシラバルワー（白原拝所）に於いてさえ海拔48mに過ぎない。湧水と舟着場との関係から集落は中央断層の北側に位置して発達している。

昭和28年度に於ける柳田国男先生主催の「南島文化の総合調査」の際、波照間島が特に考古学上の調査対象としてえられたのは、全島が八重山諸島の最南城に属し、台湾本島の東北岸に近接している島でありながら、何らの調査が行われていなかったからである。全島の下田原貝塚の発掘調査に主力を注いだのは、全島をくまなく踏査した結果、全遺跡が最も古く、且攪乱されていない包含層を保存していると見たからである。

II 下田原遺跡の発見と全遺跡の発掘調査の経過

我々は昭和29年3月18日夕刻全島に上陸して、4月6日全島を去った。その間、最初の4日間、くまなく全島を踏査した結果、名石村（ないしむら）、前村、北村の3村が近接して見られる全島の中央台地上にも、台地西方にある外村（ほかむら）にも粗製の石器とともに、沖縄に於いてパナリ焼といわれている厚手の先史系土器が近世の中国陶片と共存して発見されることが判明した。なお台地北縁の海辺低地で下田原とよばれる地域の山田均氏所有の畑地を中心にして、東西ほぼ200m、南北ほぼ120mにわたって、粗製の石器が表面採集された。尚この畑地—甘藷畑及び粟畑—中には2カ所に開墾時耕土中から除去された自然礫をつみ上げた堆石があり、その中に多量の石器、貝器が発見された。耕地所有者の山田均氏によると、犁耕するとき、犁先に貝が当たって犁がとび上がるので、貝をとり除いて堆石につみ重ねてきたと語っていた。

同遺跡は波照間島中央台地の北縁に位置するが、島全体から見ると、全島北海岸のほぼ中央に位置している。附近には大泊浜とよばれる僅かながら砂浜の発達した海辺がある。湾をなし、船着き場としての適地

琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査

である。台地縁から海岸に至る間は耕作に適した土地にめぐまれている。また台地縁には泉地がある。なお全遺跡から八重山群島に於ける最も重要な大島である西表島が手にとるように望見出来る。(Pls. Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ)

大泊浜では年中行事の中でも最も重要な穂利祭に関係のある祭事が行われることも、この地区が島の歴史の上で重要な意味をもつことを暗示している。中央台地上の集落地区から大泊浜に至る道は神の道とよばれるものの一部をなして、沿道にアラバーとよばれる聖地が点在する。(Pl. Ⅱ)

以上の諸事情はこの地区が島の歴史の上で重要な意味をもっていたことを暗示していると思われる。我々が下田原遺跡の発掘調査に主力をおいたのは以上のような状況を把握した上でのことであった。

全遺跡の発掘は3月23日から着手して、3月28日迄行い、3月29日から4月1日にわたって測量を行った。発掘地点はボーリング棒をもって貝層を探り、位置を決定した。全地は厳密にいうなら、南北の方向に微弱な起伏があり、東西の方向にも微弱な傾斜があるが、大体に於いて平坦地とってよい地形を示していた。なお発掘地を含む遺跡の全面はよく開墾されて農作地となっているが、発掘地一帯には当時西瓜の種子がまかれてあり、僅かに発芽した所であった。従って表土上層の約10—15 cm位は浮覆土をなしていた。我々は先ず黝黒色の表土上層を除去した後、その下層の暗褐色層を層にかかると発掘した。暗褐色層は固着した固い層をなしていたが、犁先が貝層面に達していることを地主の山田氏より聞いていた上に、甘藷の根部の残留が所々に見られたので、旧耕土層として扱うことにした。この旧耕土層もあまり厚くなく、20 cm乃至25 cm、最も厚い部分にしても30 cmに及ばなかった。然し貝と土器片、石器片をまじえている所を見ると旧耕土層の一部は貝層の一部であったであろう。その下部は貝層をなしているが、部分的には貝の包含の見られなかった所もある。貝類はシャゴウ、夜光貝等の熱帯海洋性の大型のものを主体としているので、それらの貝は耕土旧層下の未攪乱の基盤の上に敷石をしいたように固着して包含されていた。貝包含層は土を混じ、やや黒色を帯びているが、その下層は鮮かな赤褐色粘土層となる。貝層の厚さはほぼ20 cm乃至25 cmの深さを示していたが、一部に陥没部があり、その深部は旧耕土層下73 cmに及んでいた。従ってこの部分が貝層の最も厚い層を示すものである。一般には貝層下約50 cmにして珊瑚礁表面に達する。

遺跡形成以前は岩礁の上に表土が堆積し、その上に海辺植物のジャングルが形成されていたと考えられる。そしてその表土は陸耕するに十分な堆積を示していたと考えられる。

発掘は南から北に2m×6mのトレンチを設定し、2m×2mの区別にⅠ、Ⅱ、Ⅲと区をわけた。

然しこのトレンチの設定によって南方に貝層が微弱であることがわかったので、第Ⅱのトレンチは北方に延長して、2m×6mを設定し、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、と区をわけた。第Ⅲのトレンチは更に北方に延長して2m×6mを設定し、Ⅶ、Ⅷ、Ⅷと区をわけた。このトレンチを掘った際、Ⅷ区に陥没部のあることが判明した。

(Pls. Ⅴ, Ⅵ)

Ⅲ 下田原貝塚遺物包含状況

1 第1 トレンチ

(a) Ⅰ区 旧耕土層：粗い白色砂粒を含む先史土器片7出土。厚さは1.6 cm乃至1.8 cm。何れも断片。他に黝黒色の近世陶片1、猪骨1片出土。混入貝は別表参照。

(b) Ⅰ区 混土貝層：ハナビラダカラの殻頂部を割断して磨いたもの1、ウミニナの殻頂を切って小孔を通したもの1出土。猪骨出土19片、その中に焼骨が1片見られた。他にオオムダイ *Callyodon forsteri* の前主上顎骨 premaxillary 1片出土。貝層下は赤褐色の粘土層となる。遺物の包含は見られなかった。包含貝は別表参照。

(c) Ⅱ区 旧耕土層：文化遺物は見られなかった。猪骨4片出土。混入貝別表参照。

(d) Ⅱ区 混土貝層：文化遺物は見出されなかった。猪骨32片。その中に焼骨1片が見出された。貝層下は赤褐色粘土層となる。包含貝は別表参照。

(e) Ⅲ区 旧耕土層：リュキュウサルボウの殻頂部に穿孔のあるもの1例出土。混入貝は別表参照。

(f) Ⅲ区 混土貝層：帯青色の緻密な石質の磨製石斧の刃部断片1出土。獣骨の包含は見られなかった。オオムダイの歯骨 dentry 1出土。貝層下は赤褐色粘土層となる。包含貝は別表参照。

2 第Ⅱ トレンチ

(g) Ⅳ区 旧耕土層：粗い白色砂粒を含む先史土器片3出土。厚さ1.4 cm 乃至1.7cm。直口形式の口縁1。内径12.6 cm。

(h) Ⅳ区 混土貝層：粗い白色砂粒を含む先史土器片6, 碎片5出土。厚さ1.3 cm 乃至1.9cm。猪骨50片出土。包含貝は別表参照。

(i) Ⅴ区 旧耕土層：石器4出土。その1は帯青色の緻密な石質の石材を用いた石斧, その刃先は両面から磨研されている。他に3例は砂岩質石器。その1は片刃形式。他の2例は石鋏と見られる。混入貝は別表参照。

(j) Ⅴ区 混土貝層：粗い白色砂粒を含む先史土器片8出土。厚さ1.35 cm 乃至2.4 cm。輝緑岩または斑縞岩質の石器2出土。その1は扁平にして, やや幅広く, 磨製。他は刃部のみを磨研したもの。何れも片刃形式。他に扁平の円礫1出土。猪骨56片出土。その中に焼骨1片が見出された。他にオオムダイの前蓋骨 preopercle 1出土。貝層下の赤褐色粘土層直上にスレート製扁平片刃石斧1, 猪牙1出土。包含貝は別表参照。

(k) Ⅵ区 旧耕土層：粗い白色砂粒を含む先史土器片1出土。厚さ0.9 cm。他にハナビラダカラの殻頂部を割取し, 磨研した貝飾1出土。猪骨29片出土。その中, 焼骨4片が見出された。混入貝は別表参照。

(l) Ⅵ区 混土貝層：粗い白色砂粒を含む先史土器片1出土。厚さ1.4 cm。ハナビラダカラの殻頂部を割取し, 磨研した貝飾1出土。猪骨32片出土。その中, 焼骨7片が見出された。他にオオムダイの外後頭骨 exoccipital 1, 前蓋骨 preopercle 1 出土。包含貝類は別表参照。

3 第Ⅲ トレンチ

(m) Ⅶ区 旧耕土層：文化遺物は見出されなかった。猪骨11片出土。包含貝は別表参照。

(n) Ⅶ区 混土貝層：粗い白色砂粒を含む先史土器片9出土。厚さ1.2 cm 乃至2.0 cm。底部破片2。その中1は1.8 cm, 他は2.0 cmの厚さを示した。口縁破片2, その中1は1.2 cm, 他は1.4 cmの厚さを示した。口縁は外反せず, 直口形式を示している。口縁部の復原出来たものについて見るにはほぼ内径13 cm。貝層下の赤褐色粘土層直上に粗い白色砂粒を含む先史土器片5出土。厚さ1.4cm乃至1.65cm。局部磨研の石鋏1, 自然礫の両面に磨研を加えたもの2(その1は砂岩礫, 他は珊瑚礁塊使用)出土。他に猪骨53片出土。その中, 焼骨2片が見出された。不明魚の下骨類と背骨各1出土。Ⅶ区とⅧ区境界に骨針1出土。包含貝は別表参照。

貝層下部込部にも遺物が見出された。粗い白色砂粒を含む先史土器片6出土。厚さ1.7 cm 乃至2.4 cm。磨研面を有する扁平円礫, 殻頂部に穿孔を有するサルボウ製貝輪1が得られた。他に猪骨57片。その中, 焼骨1片が見出された。

(o) Ⅷ区 旧耕土層：文化遺物は全く見出されなかった。猪骨81片出土。その中, 焼骨2片が見出された。混入貝は別表参照。

(p) Ⅷ区 混土貝層：粗い白色砂粒を含む先史土器片17出土。2例を除き, 何れも内外面剝落のため, 本来の厚さ不明。2例の中, 1は底部, 厚さ1.9cm。他の1は器壁, 厚さ1.1 cm。小形扁平石斧2出土。その1辺はスレート製。他は帯青色の緻密な質の石材使用。他に牙器(削り痕を留める)2, サルボウ殻頂部に穿孔せる貝器1出土。猪骨396片出土。その中, 焼骨27片が見出された。魚骨3片, オオムダイの dorsal fin, spine, pharyngeal mill, 背骨出土。包含貝は別表参照。

(q) Ⅸ区 旧耕土層：粗い白色砂粒を含む先史土器片2出土。1例は厚さ2 cm, 底部。他の1は小破片, 砂粒を含まない。猪骨77片出土。その中, 焼骨3片が見出された。混入貝は別表参照。

琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査

(r) IX区混土貝層：粗い白色砂を含む先史土器片24出土。厚さ1.2cm～1.6cm帯青色の石斧（断片）1、砂岩製石針1、扁平円礫2（その中1は磨研面をもつ）殻頂部に穿孔を有するサルボウ5がえられた。

調査地区出土の貝は次表に集計表示する。破壊による欠落があっても個体を窺えるものは1個として扱い、小破片は破片数を記載した。

以上の状況を通して見るに、遺物は現耕土中に於いてはよく除かれていたが、旧耕土中には僅かながら残存が見られた。又貝層の表層は犁耕の際、犁先にかけて除かれたものもあると見られるが、未攪乱の層があり、この層から最も多く獣骨が出土した。獣骨は若干の魚骨を除けばすべては猪骨で、その長管骨は殆んどすべて破碎されていた。文化遺物も亦未攪乱貝層から発見された。貝層下は赤褐色の粘土層となっているので、赤褐色粘土層直上に遺物が密着した状況で見出されたが、粘土層内への陥入は見られなかった。

耕土下の貝層は1層のみでその下は基盤になる。包含された土器は粗い白色砂粒を含む無文の土器で、後代のパナリ焼に連絡をもつと考えられる土器である。貝層及び基盤面上に見出された土器は全く以上の土器一色で他に異系の土器の混入は全く見出されなかった。

台地上の遺跡に於いてはパナリ焼系の土器と共に元末明初を最古とする中国陶片と共存しているのに、貝塚に於いては旧耕土中に1片の中国陶片が見出されたのみで、貝層中には中国陶片は全く見出されなかった。また台地下縁の下田原の広はんな範囲の表面採集に於いても僅かに1片が発見されたに過ぎない。以上の状況から見ても、本遺跡の地域は中国陶器の流入する以前に下田原貝塚人によって占拠されていたものであることが推定される。

ただし遺物包含層である貝層が極めて薄いことを通しても、長期にわたる居住が行われたものではなからうと考えられる。

IV 貝塚出土の遺物についての考察

遺物の出土状況については発掘経過の項に於いて記載した。本項に於いては遺物についての考察を追記しておきたい。

A 文化遺物

(1) 土器 (Pls. X X VIII)

貝塚出土の土器は1片の破片を除いて、すべて粗い白色砂粒を含んでいた。

口縁は直口に近く、無唇の形式。直口のもの、僅かに外反するもの、僅かに内彎するものが見出される。その断面は角状、円頭状、僅かにふくらみを示すもの等がある。出土資料中、計測出来た少数のものは口径13cm程度のものであった。口縁に近く把手を附着する形式は八重山先史土器に一般に見出される形式であるが、この発掘によっては得られなかった。然し遺跡地区の表面採集によって1例が得られた。また、1959年8月の早稲田大学調査団のわれわれの発掘地点に接近した地点に於ける発掘によって4例発見されているから、把手をもつ形式は既に下田原貝塚時代に登場していると見られる。

口唇をもたぬ、直口に近い口縁の器形は八重山先史時代土器一般に見られ、また近代に迄行われた有唇壺形器形のものとはやや相違するが、この形式のものが近代に全く見られないわけでない。全島前村の野底家で粟の収穫祭の際初穂を煮る祭器として伝えられている土器は器形、大きさからいって貝塚土器に酷似していることは興味深い。

(2) 石器 (Pls. VII-1, VIII-1～2, XVI-1～11, XVII-1～5)

石斧：発掘によって得られた石器の中、全形を備えた石斧5例。刃部を留めていないが石斧と見られるもの4例、石斧の刃部又は刃部断片と見られるもの5例。従って石斧又はその部分と見られるものは14例。製作から見ると刃部を磨研し、他部を打製によって整えたものが多い。刃部以外の部分にも磨研を施したものは僅かに2例。断面はwide ovalのものが大部分。定角型に近い断面を示すもの1例。

完形品について見るに、短冊型を示すものは、現行の鉄製の耨耕具ビラ（ヘラ）に似た器形を示してい

る。器形は打製によって調整されているが、刃部のみは磨研によって調整されている。所謂局部磨研石器である。同様の局部磨研石器は早く縄文早期に見出されるが、九州に於いては縄文晩期に於いても登場する。石斧に用いられた石質は輝緑岩或いは斑瀾岩と見られるもの、角閃石片麻岩もしくは片状角閃石閃緑岩と見られるもの、即ち帯青色の緻密な石質のものを主体としているが、比較的薄手のものに砂質スレートを用いたものが見出される。

ピラ型の石斧は現行の鉄製ピラの用途と対比して見る時恐らく耨耕用の石器と見られる。薄手小型の刃器2例は所謂耨器とは考えられない。断面三角を示す石器は、先端が尖形を示してはいないが、beaked adzeの類型と見てよいであろう。やはり耨器であると考ええる。

磨研調整された扁平円礫：扁平自然円礫を両面及び側面を磨研して化粧用石鹼のような形に調整したもの2例、特別に手を加えてはいないが、なめらかな面をもつ扁平自然礫1例が出土している。

これらの中には両端もしくは一端に打痕を留めているものがあることから見て、ハンマーとして使用される場合もあったと考えられるが、単にハンマーとしての用途のために器面及び器形の調整が行われたものとは考え難いと見ている。土器製作の際に扁平円礫を器面調整に使用する例は現存の未開民族の習俗の中に見出される。その事例から見て扁平自然円礫の用途を考えて見ることも不当ではないと考える。

石針：砂質スレート製の石針2例が出土している。衣料に先ず孔をあけ、皮または繊維製の紐あるいは糸を通したものであろう。

砂岩製角柱状石器：断片であるので器形の全容不明。また用途も不明。

角状石器：珊瑚礁を用いた角状の石器が1例出土している。用途不明。

石錘：珊瑚礁塊を円礫の如くに調整し、両側にノッチを加工したもの。石錘であろうかと考える。

以上の石器に用いられた石材の石質同定は九州大学生産科学研究所の松本惲夫氏の鑑定によるものである。松本氏によると珊瑚礁を除いて波照間島に産出しない石材であるという。上述の石材の中、砂岩・粘板岩・輝緑岩或いは斑瀾岩は西表島古見岳一帯及び石垣島に産出されるが、角閃石片麻岩もしくは片状角閃石閃緑岩は石垣島オモト岳一帯に産出されるに過ぎないとされることは注目に値する。このことは石器の用材の大部分は指呼の間にある西表島からはこぶことを得たと見られるが、下田原貝塚人は西表島のみでなく、石垣島とも交渉をもっていたことを暗示するものといえよう。

(3) 貝製品 (Pls. VII-2(4~6), IX-1, 2)

貝製品：貝塚中よりリュウキュウザルボウの殻頂部に穿孔したものが12例出土した。現行の土俗例から見て網または袋網をひく網の錘或いは磯魚を籠又は、網の中に追い込む時の追込具に装着されたものであろうと考える。

貝製品の中にはヤコウガイの蓋の辺縁を打ち欠いたものが出土している。穂摘み具としての用途をもつものではないかと考えるが、この仮説については更に広い事例の上に立って論証を行う用意が別に進められている。

貝製品中、装身具と見られるものが3例ある。ハナビラダカラの殻頂部を打ち欠き磨研したもので、近い土俗例では台湾のインドネシア系原住民族の装身具中に顕著に登場する。

(4) **骨器：**骨針と見られるもの3例がある。他に牙器2例がある。(Pl. XXXV-4, 5) 砂質スレート製の石針と同様のもので、衣料に孔をあけるためのものと考えられる。

B. 自然遺物

(1) **貝類** (Pls. XXXII, XXXIII, XXXIV)：貝塚を形成する貝類は暖海岩礁性の貝を主体としている。ニメジャコ・ヒレジャコ・シャゴウ・ヤコウガイ・ラクダガイ・スイジガイ・クモガイ・オキニシ・チョウセンサザエ・オニコブシ・サラサバティ等が目立っているが、リュウキュウサルボウ・リュウキュウバカガイ・マスオガイの如き二枚貝も見られた。陸産のアカマイマイが1例えられたが、これは混入によるものであろう。

琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査

発掘によって得られた貝類は悉く採集した上、もち帰えり、一部を京都大学理学部動物学教室の佐藤英美博士、他を木産大学校増殖学教室の綱尾勝博士に同定を仰いだ。Tridacna 系の貝即ちヒメジャコ・ヒレジャコの破片は、Tridacna 属破片として一括した。

(2) 獣類 (Pls. XXXV, XXXVI) 及び魚類 我々の発掘によって見出されたのは陸獣では猪骨のみ。魚類にはオオムダイが見られたが、魚類の骨は意外に少かった。猪は野猪としてこの珊瑚礁の小島に原棲していたとは考え難いから、他島殊に近隣の西表島から搬入し、その一部は下田原地区で家畜として飼育されたものを食用にしたものであろうと考える。

魚骨の出土量は少いが、リュウキュウサルボウの殻頂部に穿孔した貝錘の発見されることなら、なんらかの網漁撈或いは磯の追込漁撈の如きが存在したことが推定される。

V 下田原地区に於ける表面採集資料

(Pls. X~XIV, XVII~XXII, X III 1~3, 5~8, XXV, XXIX-2, 3 XXXVI-1 (1, 3))

台地縁の狭い海岸沿いに東西に長く延びる下田原耕地地区に発掘地点を中心として東西にほぼ 200 m、南北に 80 m 乃至 120 m にわたって遺物が表面採集される。然しこの範囲に限るというのではなく、発掘地の南東方 170 m の台地縁にある泉地附近に於いても石斧と土器片が発見されている。

遺物の散布する地区は波照間島の山田氏の耕地となっている。この耕地には 2カ所に石積みがある。耕作時、耕具にひつかかった石塊・石器その他の遺物を取除き集積した場所である。この石積を発掘地に接近してある、それを石積Ⅰ、やや西方に離れてあるものを石積Ⅱとよぶことにする。石積Ⅰについては積石を除きつゝ遺物を採集した。貝殻類、獣骨、貝輪、石器等が発見された。石器の数は完形品 35、一部を欠いたもの 30、欠片 14 が得られた。扁平円礫に磨研を加えて化粧用石鹼形に造形したもの 1 例を除くと他は主として耨器又はその断片と見られる。大体に於いてやゝ、片刃傾向を示すが、小型にして明瞭な片刃を示す例が 2 例ある。この 2 例は耨器ではなく、別の用途をもつのであるかも知れない。

発見された土器は貝塚出土々器と同様の粗い白色砂粒を含む貝塚土器と同質の土器であるが、1 例のみ黝灰色の硬陶質の土器片が発見された。印文を有していないが、焼成と陶質は印文硬陶を想わせるものがある。

石積Ⅱはその上部を調査した程度であるが、20 個の石器が採集された。その中、完形品は 8 例。耨耕具と見られるものを主体とするが、僅かながら割竹型の片刃石器、有稜の beaked adze 系の石器が発見されている。

以上の石積以外にも耕地上に於いて遺物が発見される。耕地上に於いて表面採集によって得られた遺物は 30 個。磨研面を有する扁平楕円の円礫 1、割竹型の磨製石器断片 1、珊瑚礁を用い器形を調整した上、器頭部に穿孔せんとした痕跡を示すもの 1、を除く他は刃部に磨研の加えられた耨器と見られるものである。形は長目の短冊短形、即ちピラ型を示すものを主体とするが、刃部をやゝ広く造形せるものもある。それらの中、有段形式を示すもの 1 例がある。

発掘地点の南東方 170 m の台地縁のある泉地附近からの遺物出土のことは上述したが、採集された黝灰色土器片 2 例の中、1 例には格子目の印文が見出される。焼成から見て、また印文から見て台湾北東海岸の先史時代末期の黝灰色の印文土器に酷似する点は注目し値いすると思われる。印文を有しない他の 1 片も同質のものである。また石積Ⅰから発見されたものも同質のもので、何れも印文硬陶系の土器であろうと考える。

上述の台地縁の泉地の更に南東方 70 m 附近にも泉地があるが、この泉地附近で珊瑚礁を磨研して調整されたハート形の石器が 1 例発見された。石錘かと見られる。

VI 波照間島台地上の遺跡

台地上に於いて遺物の採集された所は、何れも東南から西北にかけての断層線の北側にして、現在集落が発達している地域である。

その東端は北村の美里ワー（拝所）附近の美里村址、その西端は外村の西方モーバルである。この間にあって、南村附近のケイシバル（掘石原）、外村の普田盛家附近のフタバルワーに遺物散布地がある。

また前村入口の民家附近で石斧が発見された。その他、名和那志地区の拝所、美底のワー附近に於いて近世中国陶片が採集された。以下これらについて順次記載しておきたい。

(1) 美里（ミザト）ワー附近の遺跡（Pl. X X VII-2 (5, 6)）

美里ワー附近は美里村々址といわれている。現在島地になっているがそこからバナリ焼系の耳状把手を有する土器と、琉球本島、奄美大島の先史時代後期に盛行する宇宿上層式土器に酷似する口縁器形を示すもの1片が採集されている。後者は山形の波状口縁を示すと同時に、ふくらみのある口唇を示している。

(2) 掘石原（ケイシバル）遺跡（Pls. X X VI-2, X X X-1）

掘石原は南村の南側に当る地区で、現在島地となっている。帯青色の片刃形式を示す石器1例が表面採集された。土器は耳状の把手を有するバナリ焼系の土器が出土する。口縁はほぼ直口に近く、底部は安定度の強い平底に近い円底を示すもの。遺跡の一部を発掘して見ると、約30cmにして基盤の珊瑚礁に達した。

(3) 前村入口に於ける石斧の発見（Pl. X II-2 (3)）

前村入口の人家附近で厚手の両刃の石斧が発見された。

(4) 外村フタバルワー遺跡（Pls. X X VI-1, X X VII-1 (4), 2 (3, 4, 8), X X X I-2）

外村の普田盛家西側のフタバルワーとよばれる地区の島地では遺物包含層の露層があり、バナリ焼系の土器の包含されている状況が見出された。散布するバナリ焼系土器片中には耳形の把手を有するものも見出された。それらに混じて近世中国陶片も見出された。発掘は行わなかったが包含層の露層から見ると約20cm乃至30cmの薄い包含をなすと見られた。土地の人によるとこの遺跡からは石斧も出土するという。

(5) モーバル遺跡

フタバルワーの西方にモーバルとよばれる地区がある。同地区に於いても石斧が発見されると波照間中学校の島村教諭が語られた。然し我々は遂に踏査する時間をもたなかった。

(6) 近世中国陶片散布地（Pls. X X X-1, 2, X X X I-1, 2）

南村の北側の名和那志（ナーヌシー）地区の拝所附近及び外村の北、美底原附近のミスワー附近に於いて青磁、飴色の釉を有する近世中国陶片が得られた。

以上にあげた状況を通じて、台地上の諸所に遺跡のあることは確実である。又少量の採集遺物ではあるが、それらが下田原の文化と一連の関係をもつものであることは疑い難い。

それらの遺跡地がほぼ現在の集落の附近にあり、且つ旧集落跡として、或は伝説の土地として知られている場所に見出されることは、これらの遺跡を遺した先住民こそ、この台地上に於ける居住地区の最初の開発者であり、現在の集落は彼らの開発のあとをひきついだものであることを想定せしめるものがあると考ええる。然してその開発の時期は遺物包含の浅さからいつても、先史系遺物と中国陶片との共存の状況からいつても遠古の時代とは考え難い。その時代をきめるきめ手は共存する中国陶片であろう。

それが古くても元代、大体に於いて明初をあまり遡ることはなからうと見られるものであることから見て、台地上遺跡の時期が比較的近世に属することが想定される。恐らくそれは近世に於ける琉球中国の貿易開始以後のことであろう。貿易には貿易に値する物産を必要とする。然し当時の波照間にかゝる物産を期待することは困難であると考えられるから、琉球本島にはいった中国貿易品が、本島からとり入れられたものと考えてよいであろう。

台地居住に際しての最大の困難は隆起珊瑚礁を握鑿して地下水を得ることであったと考えられるが、その

琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査

ためには鉄器を必要とした。従って台地遷住は中国陶器と共に鉄器を登場する時期まで待たなくてはならなかったと考えられる。かくて下田原系先住民は台地上遷住時代に及んで急速に未開時代から近代に移行したものと考えてよいであろう。

Ⅶ 波照間島出土と伝えられる石器

波照間下田原から石器が出土することは、一部の島民にはかなり早くから知られていたようである。波照間島内に於いて所蔵されている例としては、全島小学校に数点の出土品が所蔵されていた。その中に典型的な打製有段石器が見出された。(Pl. X X I-5) また全島小学校島村教諭の所蔵にかゝる石器はばち型に刃部のやゝ開いた形式の石器であった。

八重山群島中の大島、石垣島に於いて、過去に於いて学校関係の展覧会が開催された時、波照間島出土品として展覧されたものがあると聞いたので、石垣市の学校について調べて見たが不明であった。然し個人的に波照間島出土品として所蔵されているものはあった。下田原遺跡から表面採集された磨製割竹型 adze と同系の完形品は石垣市の吉野高美博士によって所蔵されていた。(Pl. X IV-1(4) X X III-8) 又ばち型に刃部のひらいた石器は石垣市の民家に於いて波照間島からの伝来品として所蔵されていた。

全島出土のものとして日本本土に於いて所蔵されている標品としては、旧制福岡高等学校の玉泉館収蔵の 1 例を挙げらるに過ぎない。島田髻式に中央部のくびれた形式のもので、刃部の形成は不十分であるが、紅頭嶼に発見される島田髻型 (waisted form) の石器と酷似していることから、やはり石器と見てよかろうと考える。(Pl. X V)

Ⅷ 波照間島先史文化の系統

下田原貝塚出土の土器は八重山諸島先史時代に広く見られる粗砂又は貝粉を混じた無文平底に近い円底の土器と同系のものであるが、下田原貝塚には貝粉を混じるものは未だ登場せず、珊瑚礁の粗粒を混じるもののみである。又その口縁器形は直口に近いもので、明瞭に外反する口縁を示すものは未だ登場していない。また把手は登場しているが、発見例が極めて少いので一般的に把手を附したものかどうか不明である。把手の形状は上面から見ても、側面から見てもほぼ三角形を示すもので、横に広い横耳状のものは未だ登場していない。横耳状の把手は台地上に遺跡が営まれる時代になって出現する。なお注目すべきは土器の出土量が極めて少いことである。

以上の状況から見ると、下田原貝塚土器は八重山先史時代土器、高宮広衛教授の所謂 Lug-pottery の初期のものとして見てよいであろう。

八重山諸島先史時代に於いて土器未伴出の遺跡であろうとされるものに西表島の仲間川河口の仲間第 1 貝塚がある。八重山先史時代に於いて比を見ない程の貝の量をもつ規模の大きい貝塚であるにかかわらず、土器が見られないとされることから考えるなら、土器出現以前の遺跡と見てよいかも知れない。然し出土石器は髻器と見られる刃部に磨研を加えた所謂局部磨研石器を主体とするもので、その点に於いて仲間第 1 貝塚と下田原貝塚とは共通する。

かく見てくると、下田原貝塚は西表島仲間地区の貝塚人が土器をもつに至った早い時期、即ち仲間第 2 貝塚時代にそのコロニーを波照間島に営んだ結果の遺跡と見ることが出来るかも知れない。完成した石器の他にその材料たり得た原石や、未成品、製作時の碎片などが、下田原遺跡及びその地域ではほとんど見出されていない。このことは波照間島先史人が西表島や石垣島において、その地の原石を用いて、すでにあら方石器を作り上げてもち帰ったことを示すものかも知れない。彼らは猪狩りには頻りに西表島に渡っていたであろうから、この想定は奇とするに足りない。

台地縁の下田原地区で表面採集された黝灰色の印文硬陶質の土器は注目に値する。格子目の印文を有するものと、無文のものがあるが、陶質から見ると、印文のないものも、印文を有するものも、共に印文硬陶系の土器と見られる。印文硬陶系の土器は台湾本島の北部海辺地方の先史時代の比較的後期に属する文化と

見なされる。北西海岸に於いてはほゞ苑裡地区に及び、北東海岸に於いてはタツキリ河口地区に及んで発見される。波照間島台地緑の下田原地区の印文硬陶系土器が台湾本島北部海辺地方のそれと酷似することは、波照間島と台湾本島、殊にその北東海岸地方との間に何んらかの交渉があったことを暗示している。その時期は、印文硬陶系土器が貝塚中から発見されないで、貝塚の終末期、台地上への遷住が行われる頃のことでないであろうかと推測される。

旧制福岡高等学校の玉泉館所蔵の島田髻式の石器は波照間島出土と伝えられるのみで出土地点が判明しないが、八重山先史時代石器には知られていない形式のものである。近年 Dr. Kerr らの努力によって久米島及び沖繩本島の一部にも出土することが知られるに至ったが、八重山諸島出土例としては、玉泉館所蔵波照間出土例以外は不明である。この器形を見る時、想起されるのは台湾江頭嶼、火焼島及び台湾本島南部海岸地方に発見される同様の石器である。江頭嶼ヤミ族は Chichivchiv no Inapo とよび、礮器として使用してきたとする伝承をもっている。

波照間島出土と伝えられるものが、台湾南部海岸及び島嶼地方の Chichivchiv no Inapo 型の石器文化圏との何んらかの交渉の結果出現したものであるかどうかを明にするには今後に於ける調査に待たなくてはならない。然し Chichivchiv no Inapo 型の器形は八重島のみでなく、南島全域の先史時代を通して見ても、顕著に異質のものであることからするなら、台湾南部圏との何んらかの交渉による出現を想定するのが自然であろうとも考える。上述の台湾北部海岸の印文硬陶文化地域には Chichivchiv no Inapo 型の石器は登場しないことから見るなら、台湾南部圏との交渉があったとしても台湾北部海岸地方を經由しての交渉があったとすることは出来ないであろう。

八重山圏と台湾南部圏との関係を考える上に参考になる資料は他にもある。台湾南部東海岸地方の先史土器には横耳形の把手を口縁に近接して有する土器が行われている。八重山先史時代に流行する Lug pottery と酷似する。但し台湾南部沿岸地方の把手には紐を通すような孔があげられているのが普通である。

なお貝器の中には、台湾南部の先史時代出土のものに類縁の考えられるものがある。サルボウの殻頂部に穿孔した例は台湾西海岸南部先史時代に例がある。現代に及んで網の錘として利用されている点に於いても、台湾南部と八重山地方は共通する。

ヤコウガイの蓋の辺縁の一部を打ち欠いて、刃器とした例は台湾先史時代に於いては火焼島及び恒春半島に知られている。

Ⅸ 波照間島発見の中国陶器

波照間島出土の中国陶器は、下田原貝塚及びその地域では、貝塚中に恐らくは偶然混入したであろうと思われる 1 個の陶片以外には 1 例も見出されていない。すべて台地上の、現代の村落附近の遺跡或いは路上、墻壁の石畳の間などから発見される。

その多くは浙江省処州の青磁の破片であり、小山眞士夫氏の鑑定では元末から明初にわたるものであるという。処州青磁以外には、他村の包含地から呉須絵陶片、アメ釉陶片、白磁片などが出ている。いずれも明代のものと思われる。

X 現代の民俗よりの考察

我々は下田原貝塚発掘の余暇を利用して、波照間島に於いて神聖な場所、或は特別な意味をもつ場所として伝承されている地点について聞き書を作った。

神聖な場所、不浄を忌む場所、近よってはならぬ場所はアラバアー、ヨミドゥル又はヨミシヤルドゥルとよばれている。その中、アラバアーが最も強いひびきをもつ。ヨミシヤルドゥルのシヤルは「准ずる」の意。ヨミドゥルのような場所の意。伝承の地名は別掲の図に示す。この報文に登場する () 内の数字は別掲 (Pl. II) 図上に数字によって示した地点に対応する。

琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査

下田原貝塚地区を中心とする西北海辺には様々の聖地や旧址がある。先史時代にひきつづいて島の初期の歴史が展開したと見られる地区であるので、それら聖地や旧址について附記しておきたい。

波照間のほぼ南半は断層のために地下水の湧水がなく、ために現在集落が見られないばかりではなく、過去に於いても集落の営まれた痕跡は見られない。然るに西北側には下田原貝塚の如き先史遺跡があるし、スミス村(35)、タカツムラ(36)、マシクムラ(37)等の廃村の跡が海辺にあり、それらの遺跡からは下田原貝塚系の土器が出土する。下田原貝塚そのものについての伝承はないが、貝塚に近い船着場の大泊浜の直ぐ上のペーバルザキには興味深い伝説が伝えられている。四月のプーリ(稲の穂祭り)の前夜、ペーバルザキの神は西表島のハイミハチルマ嶽の下のアラバアーにいます神に、明日はプーリを行くと告げるといわれてきている。下田原貝塚人の故地が西表島にあったことを暗示していると考えられる。大泊浜のペーバルザキの上方台地縁には泉地(9)があり、そのそばに祭尊に際して供物をする岩がある。この泉地は下田原地区に於いて利用し得る唯一の重要な泉地である。この地域はこの海辺に於けるアラバアーとなっている。

九月亥の日のシツ(節)の第3日目に西北側の下田原地区を中心とする海辺、大泊、真泊、ミシク泊で行われるヅフニコギ(船競)の行事は興味深い。南村、北村の青年は大泊浜で、前村、名石村の青年は真泊の東の浜で、外村の青年はミシク泊でそれぞれパマサリヤ(軍配ヒルガオ)を頭にまき、また船の首尾にかざってヅフニコギを行い、午後には以上の3カ所の浜の勝者が大泊浜に集って、3隻のサバニ(小舟)を浮べてヅフニコギを行う。下田原貝塚に最も近接した大泊浜が歴史的に最も古い浜であり、やがて真泊、ミシク泊が利用されるようになったものであろうか。これらの海辺はそれぞれアラバアーとなっている。

下田原地区にひきつづいて開発されたと思われる上述のスミス村地方にはスミス、タカツ、マシクの3村が見られ、更にそれらに続いて開発されたと思われる台地上に現在の5村が見出されることは、初期の1乃至2村(もし双分制が考えられるとすれば)から3村、更に5村と展開したと見られよう。

廃村スミス村附近にジモジ井戸とよばれる井戸がある。ヨミドウルとなっている。プーリの際、現在の台地上の5村からこの井戸に供物をする。また雨乞の時に全島の主要な5つのワー(拝所)からジモジ井戸に水をもらいに来る。

スミス、タカツ、マシクの3廃村地区出土の土器は下田原貝塚出土土器に比して、同系ではあるがやゝ製作技術は進んでいる。台地上集落地方に出土する土器は3廃村地区出土のものに酷似している。但し興味深いことに台地上出土の先史系土器は中国近世の陶磁片と共存する。台地上への移動展開は中国近世陶磁の流入が始まった頃にはじめて可能とされたものであろう。

鉄器の使用は3廃村時代にさか上るであろうが、陶磁の流入と共に鉄器とその技術も登場し、台地上の厚い珊瑚礁を割って井戸を開鑿することを可能ならしめたものであろう。台地上への集落の展開はこのことによって可能とされたと考えられる。然し中国近世陶磁器の流入によって先史系土器の製作は衰退したものであろう。

現在では骨壺として利用されたものを墓地に於いて見出しうるに過ぎない。

Ⅺ 結 語

以上の報告中、サルボウ製貝輪、ヤコウガイ蓋利用の貝器についてはその分布について僅かにふれたが、これらの貝器の分布の示す意義の詳細については、稿を新にして扱って見たいと考えている。

第Ⅳ図版中下田原貝塚附近の植物分布の状況は多和田真淳の同定によるものである。

波照間島下田原貝塚調査発掘の結果については1954年秋の人類学民族学大会に於いて金関及び国分が発表を行ったが、報告は今日まで未刊のままであった。こゝに報告を刊出するに当って、共同調査者の一人である多和田真淳氏に報文を送り、報文の内容について同意を得ることが時間の関係から出来なかったことは遺憾である。従って多和田氏は発掘資料の解釈に関しては自由な立場をとられてよいわけである。このことを特に明記しておきたい。(金関・国分附記)

P L A T E

PLATE I

Aerial view of Hateruma

Cross (X) showing the place where the excavation was undertaken

PLATE I

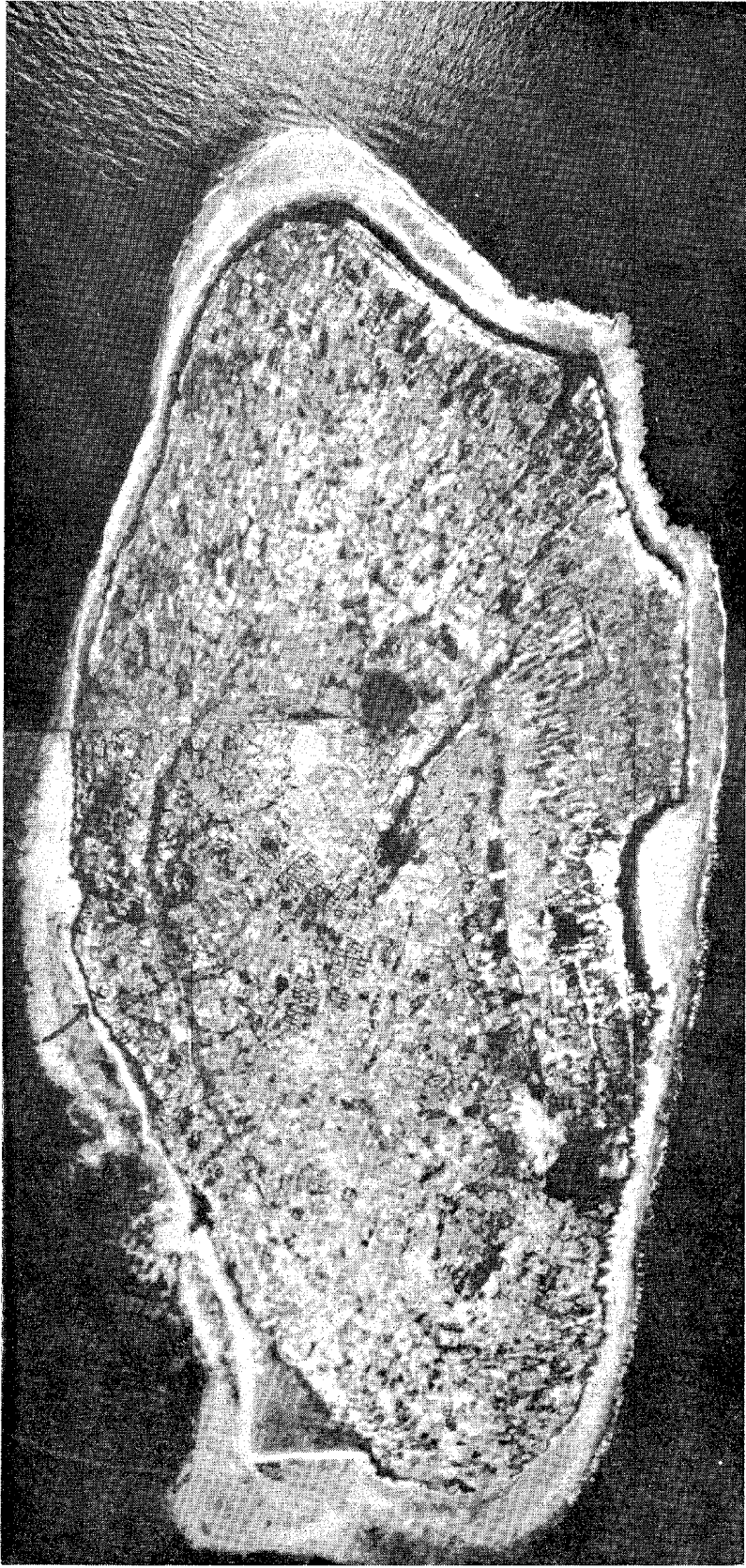


PLATE II

Hateruma Island

- 1-3,5 Yomi-shal-dul *1
- 31 Yomi-dul *2
- 4,19-22,25, Arabah *3
- 10-13
- 16-18,23,24, Wah or Ugan *4
- 37-39,41,42
- 6,7 & 9, Spring
- 10.14,34 Well
- 26 Iriagah *5
- 27 Ariyagah *6
- 28 Kunarizaki *6
- 29 Takana *7
- 30 Nanatsu-ishi *8
- 32 Katsatsani-no-ishi *9
- 33 Kashikeh-no-ishi *10
- 35 Sumusu-mura *11
- 36 Takatsu-mura *12
- 43 Grave of "Gettopala" *13
- 44 Farm where stone implements were found
- 45 Trenches excavated
- *1,2 Compared with "Yomidul", "Yomi-shal-dul means rather smaller scattered sacred places with less significant meaning
- *3 Sacred place
- *4 Sanctuary
- *5-7 Local names
- *8-10 Names are derived from the rocks found around
- *11-12 Ancient villages disappeared completely
- *13 A man in the folktale

PLATE II

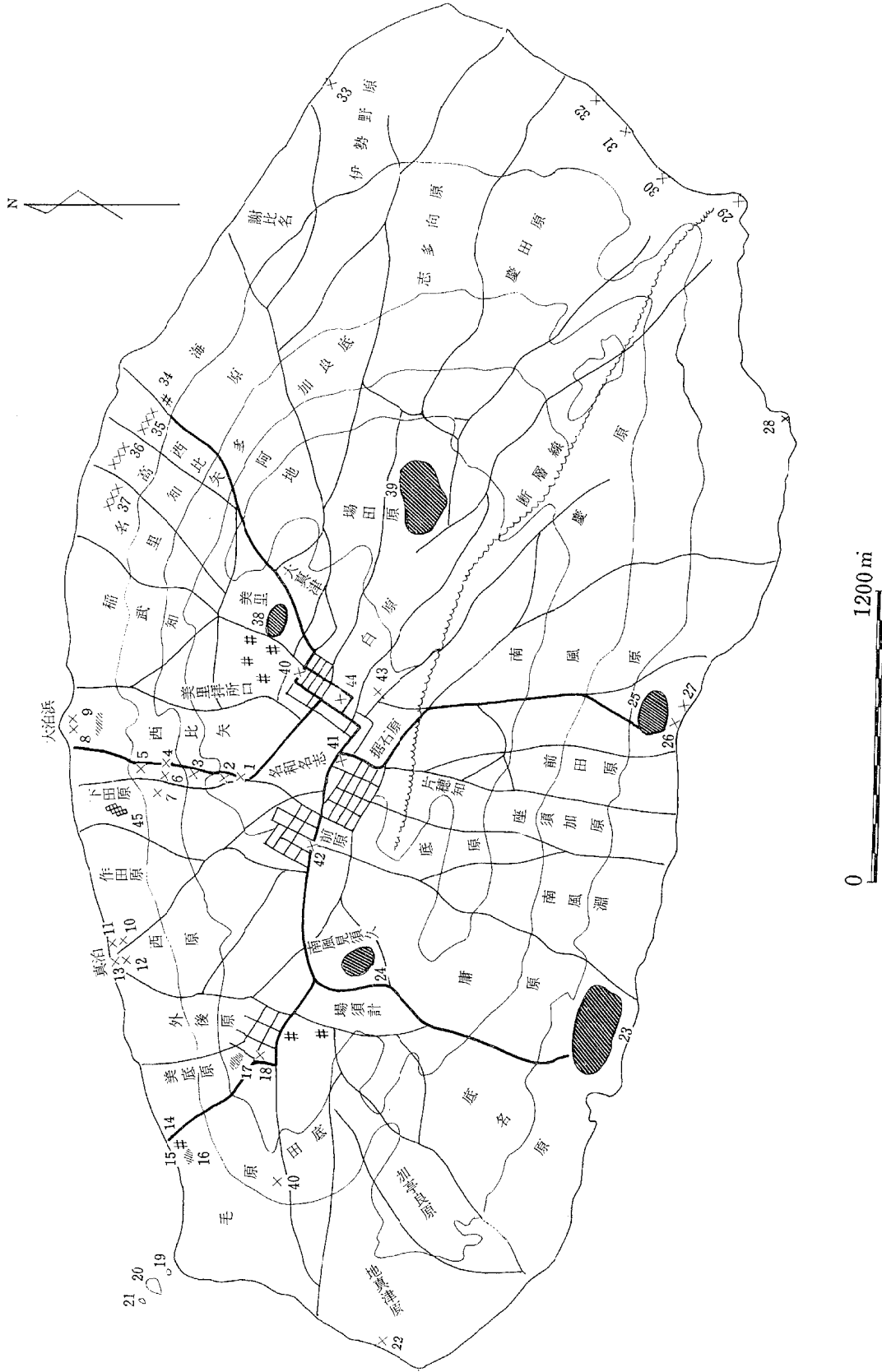
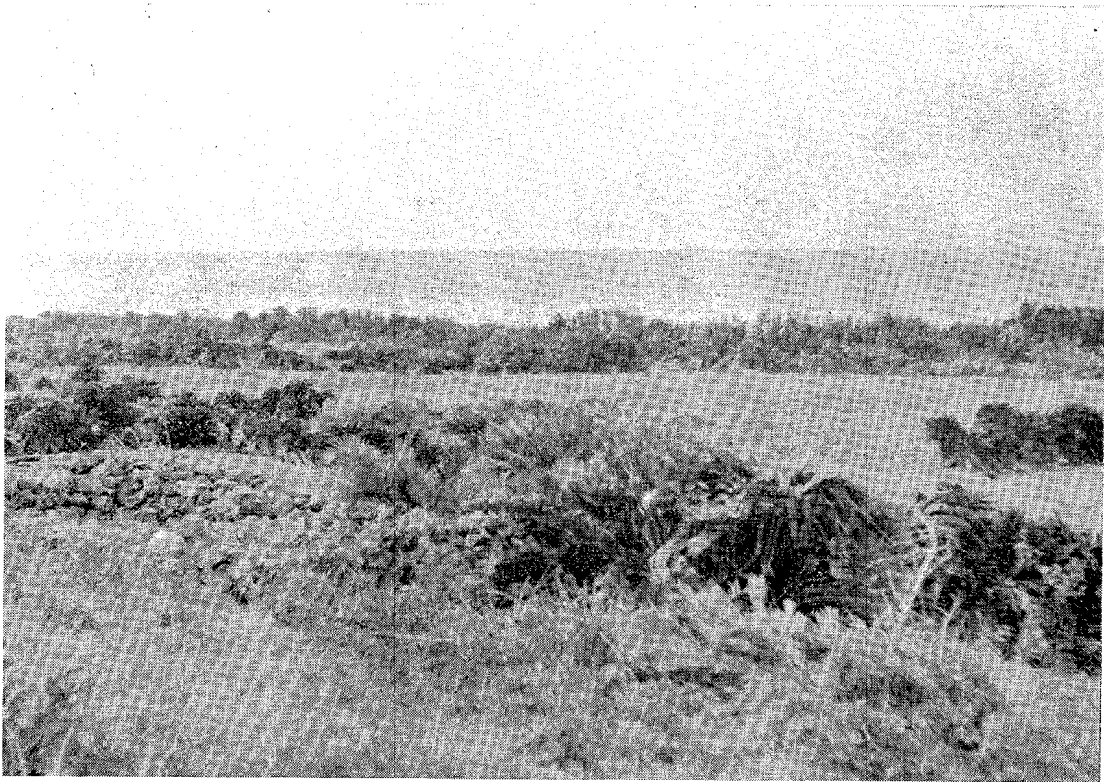


PLATE III

Shimotabaru area and excavated trenches

- 1 Shimotabaru area
- 2 Excavated trenches



1



2

PLATE IV

Shimotabaru area

- 1 Excavated trenches
- 2, 3 Stone piles brought together through farming
- 4 Place where flint fragments and grayish black ware with stamped pattern were found
- 5 Place where grayish black ware without stamped pattern were found
- 6, 7 Graves
- 8, 9 Springs

PLATE IV



PLATE V

Floor plan and cross section of excavated trenches

PLATE V

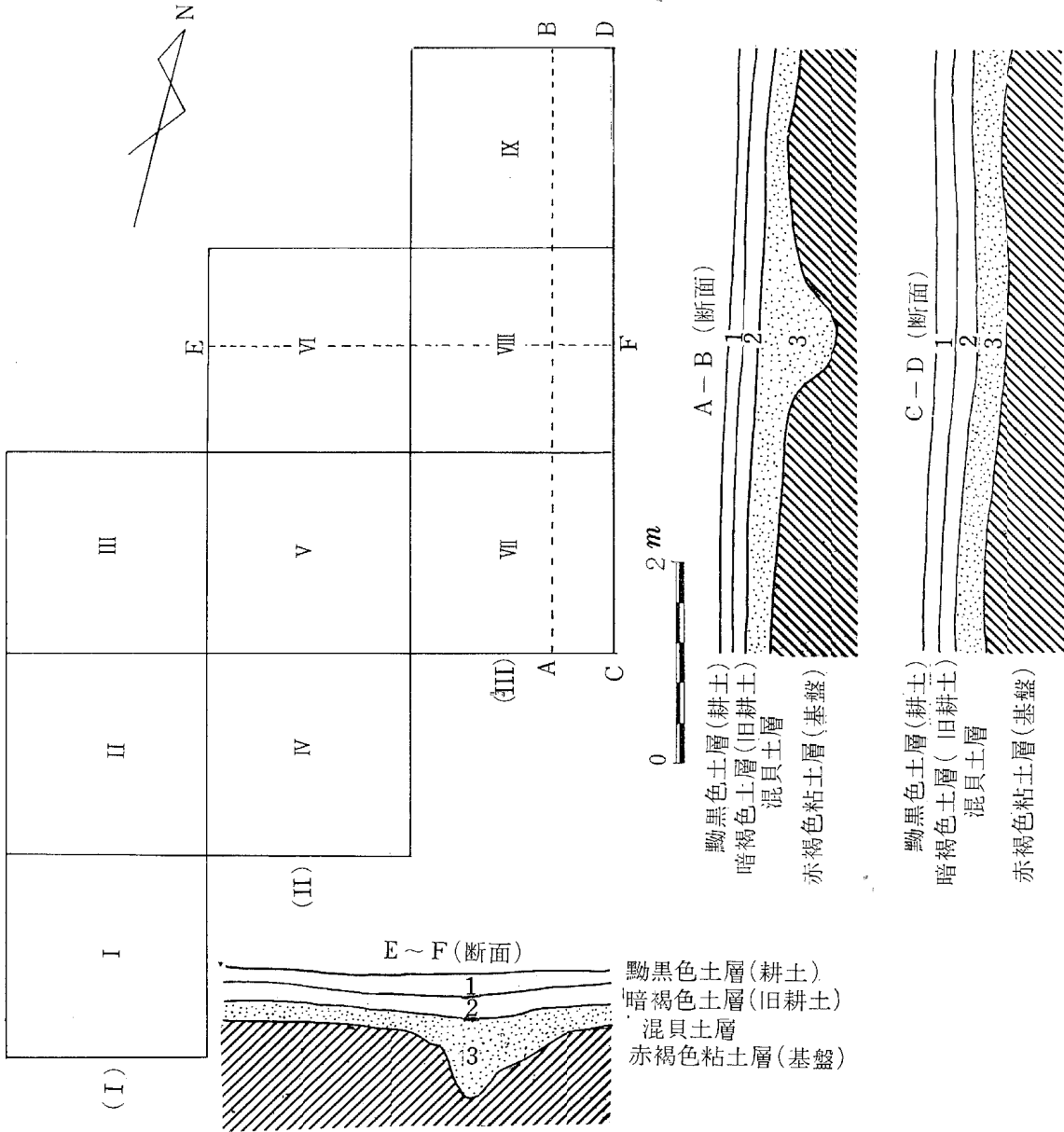


PLATE VI

Bottom of the shell layer

1 Hollow part

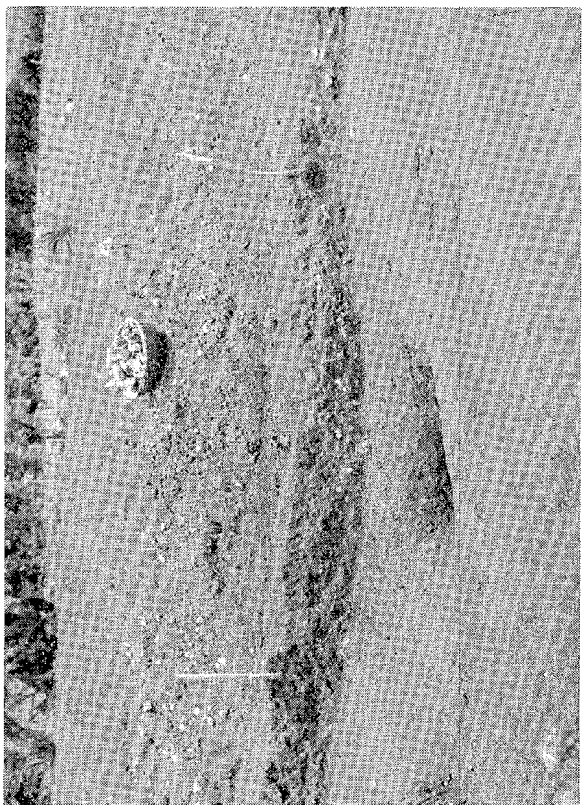
2-4 Unearthed flat sand stone with smoothed faces



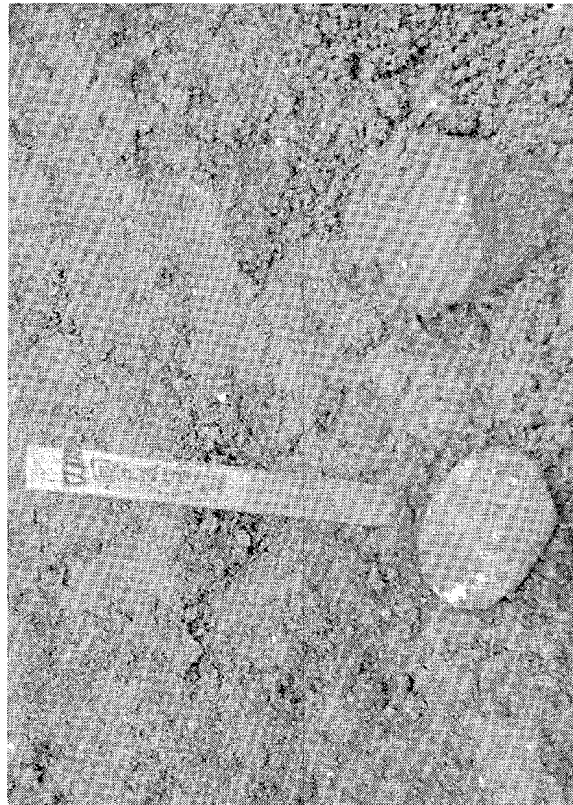
3



4



1



2

PLATE VII

Artifacts from the excavated trenches

Stone implements

- 1 1,2,4,5,7,8,9,12,13.14; In the third soil deposit containing shells
 - 3, 10 In the second dark brown soil deposit
 - 6, 11 In the top blackish soil deposit
 - All implements with exception of Nos.5,9,11,12 (slate), are of hard grayish blue rock
- #### Bone and shell artifacts
- 1, 2, 3 Bone needles from the third soil deposit containing shells
 - 4, 5, 6 Shell ornaments from the same soil deposit

PLATE VII

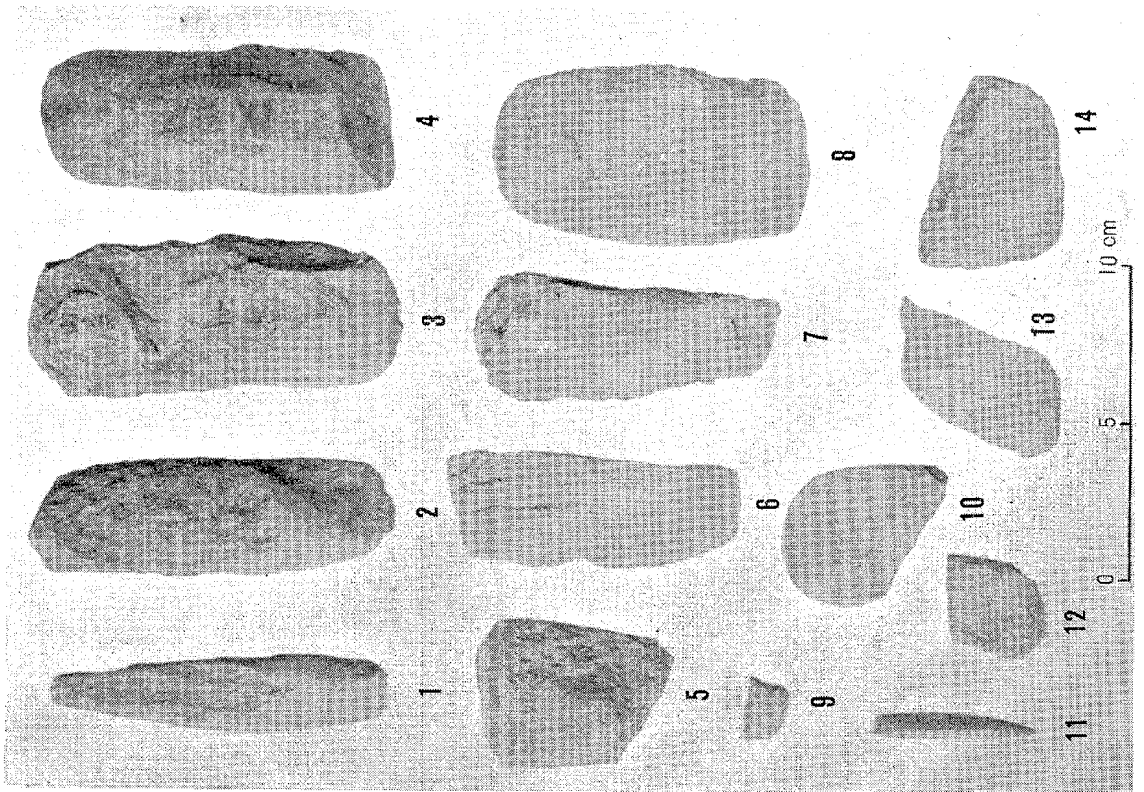
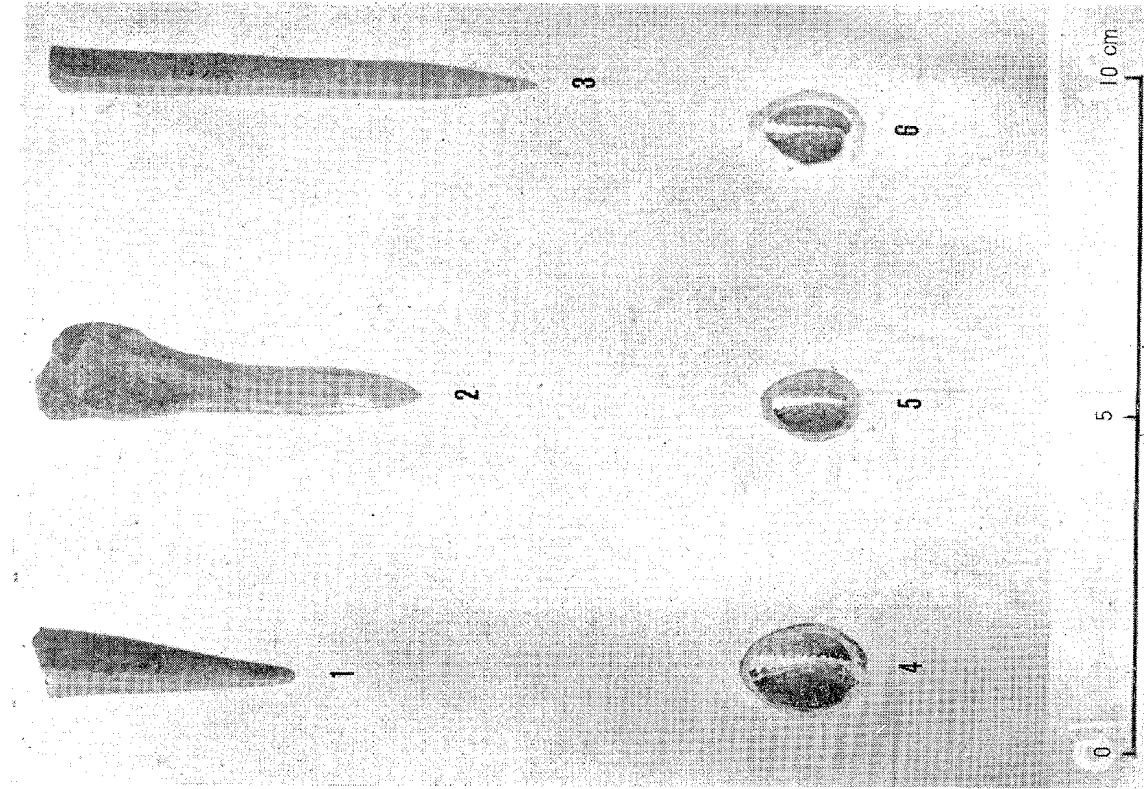


PLATE VIII

Artifacts from excavated trenches-2

- 1, 2 Flat stones with smoothed surfaces and a coral implement from the third soil deposit containing shells
- Artifacts, with exceptions of No.1 (eruptive rock) and No.5 (coral stone), are of sand stone.

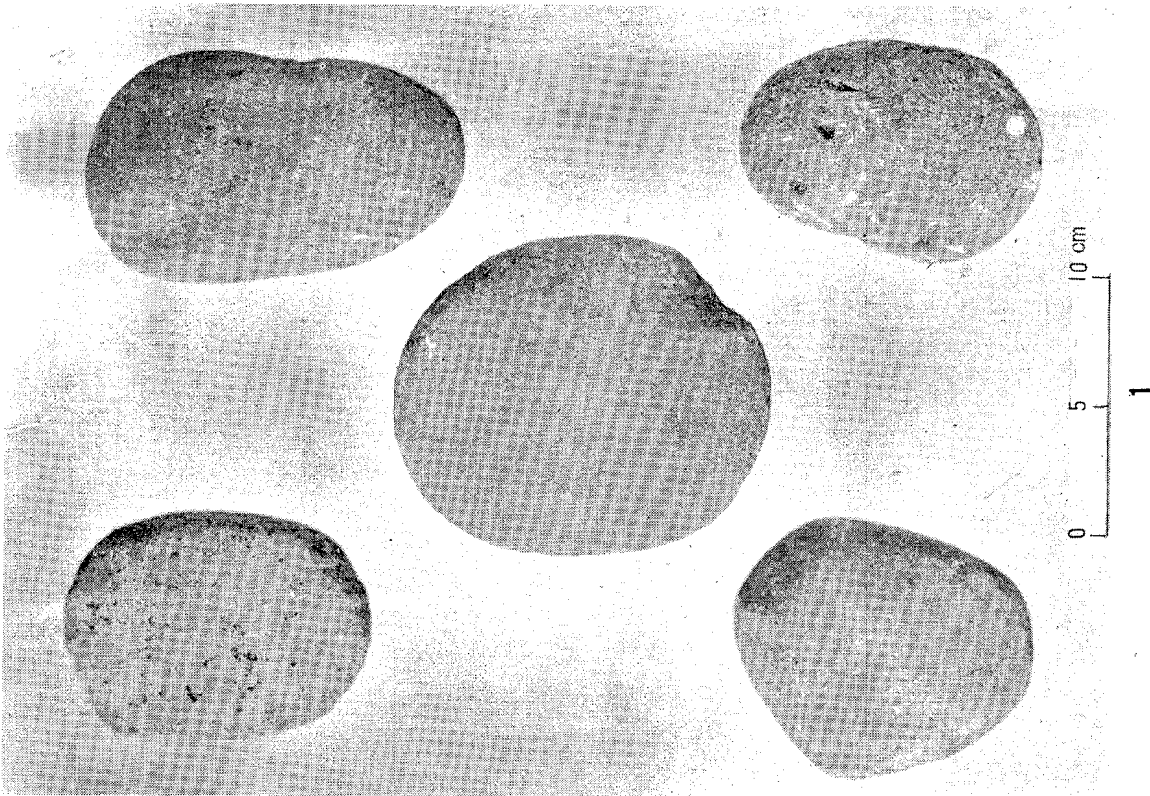
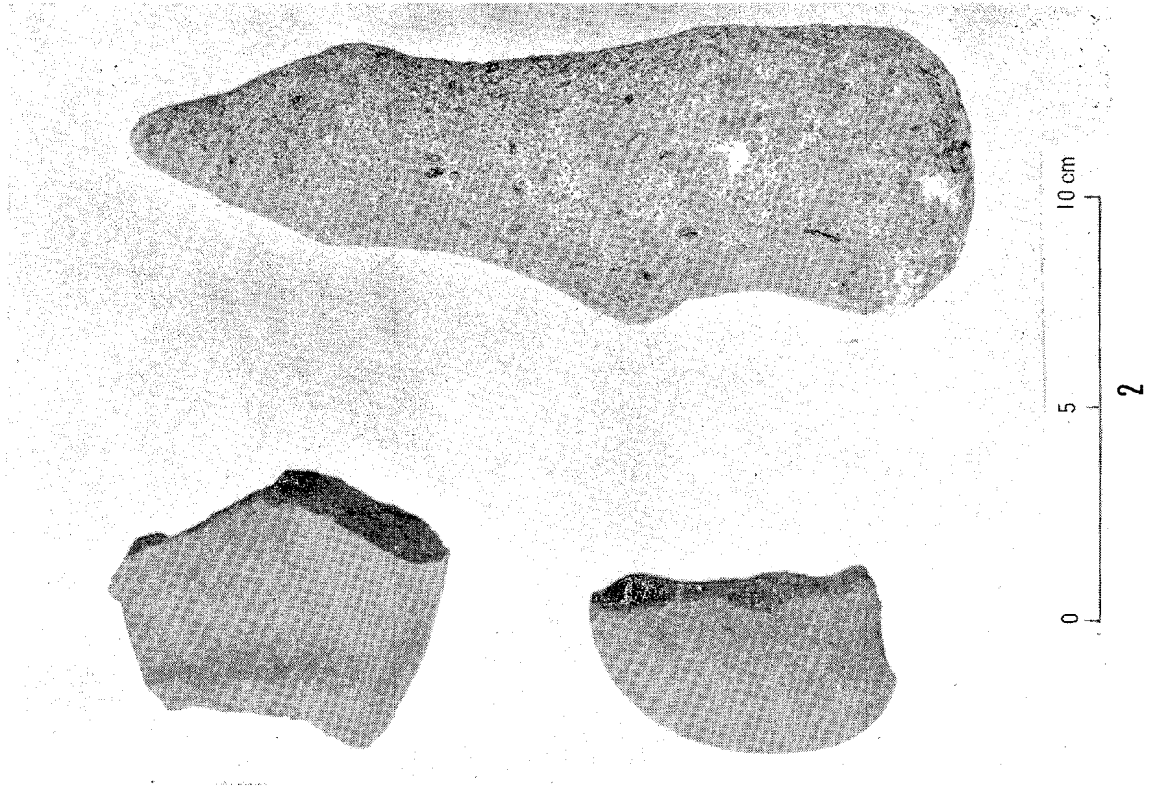
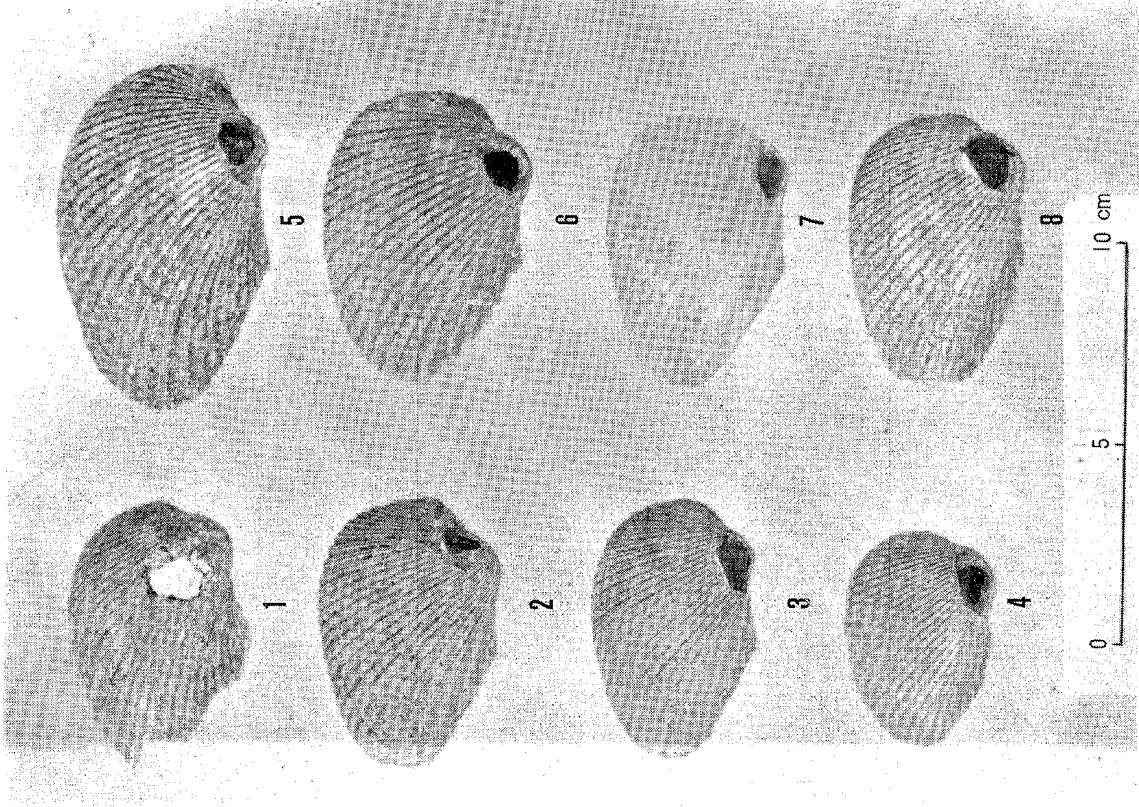


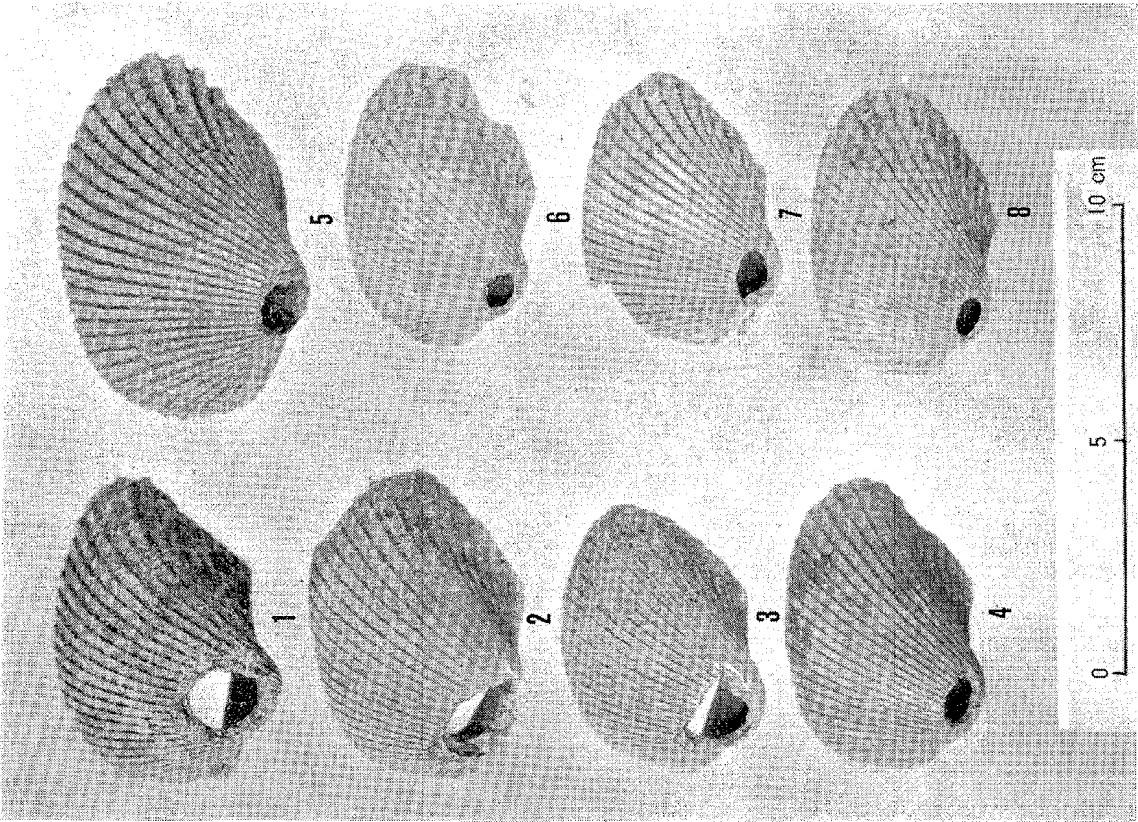
PLATE IX

Sinkers made of *Anadara scaphomaculosa* from excavated trenches
and YAMADA'S farm, Shimotabarū

- 1 Shell sinkers, with exception of one example (Yamada's farm),
are found in the third soil deposit containing shells.
- 2 Shell sinkers, with exception of two examples from (Nos. 1, 6) the second deposit,
are found in the same deposit.



2

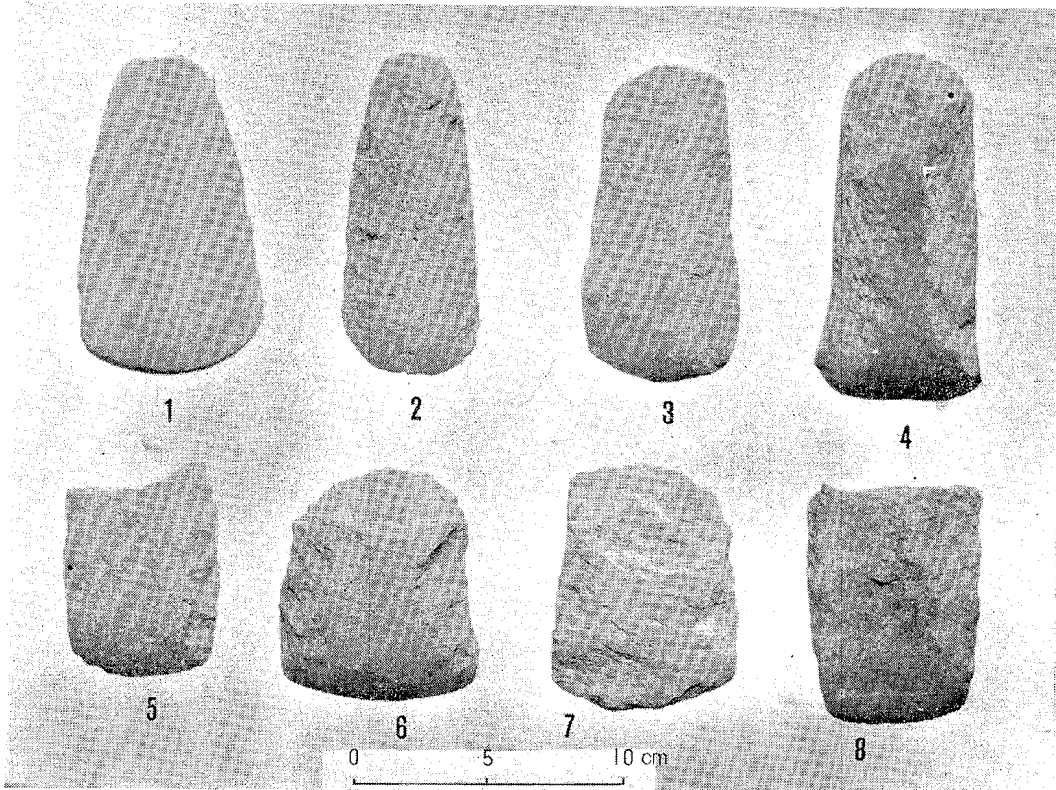


1

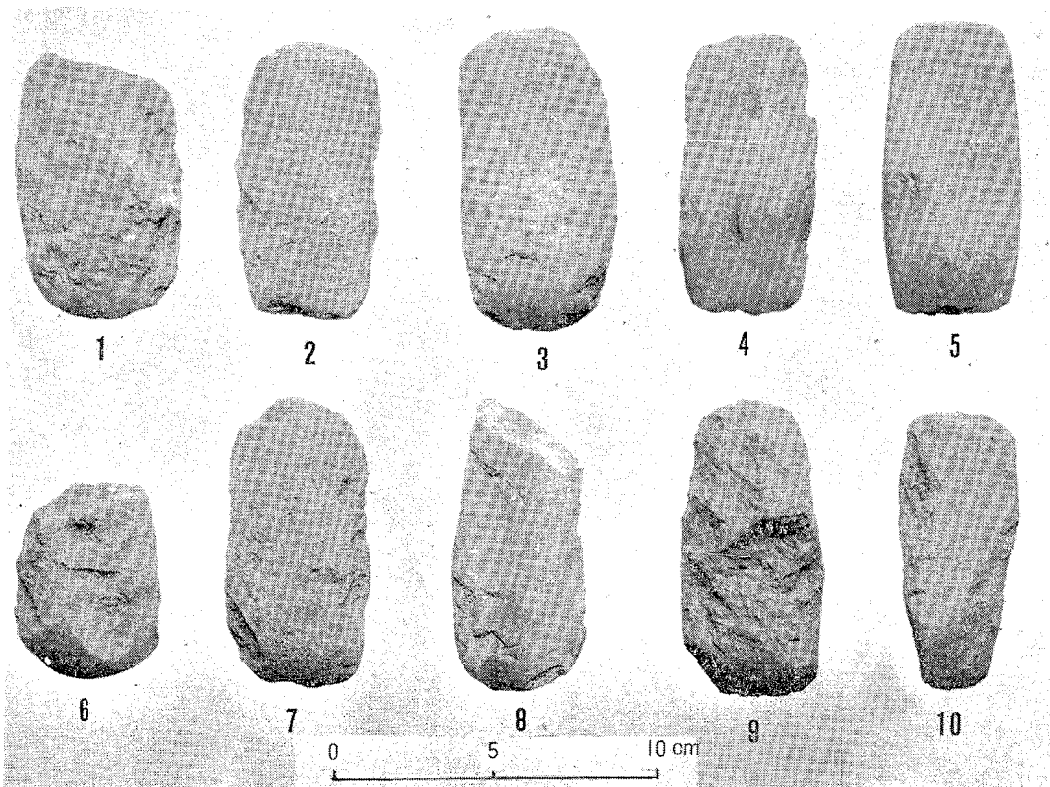
PLATE X

Stone implements from Shimotabaru area- 1

All implements are of hard grayish blue rock.



1

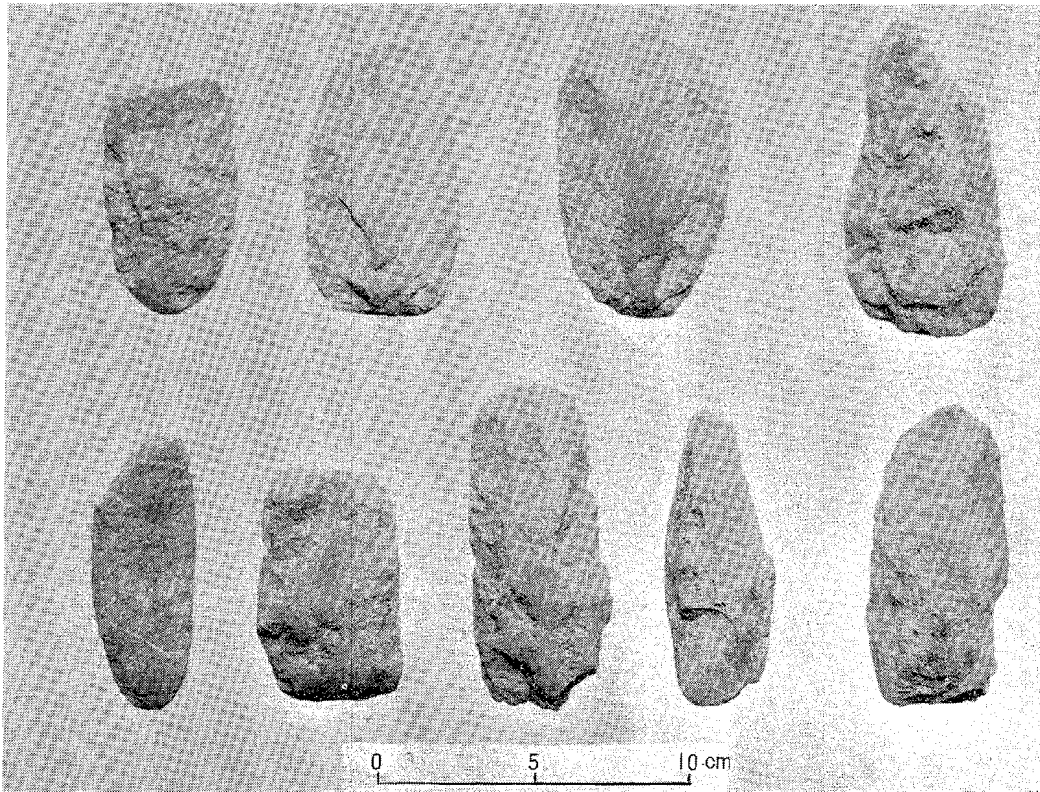


2

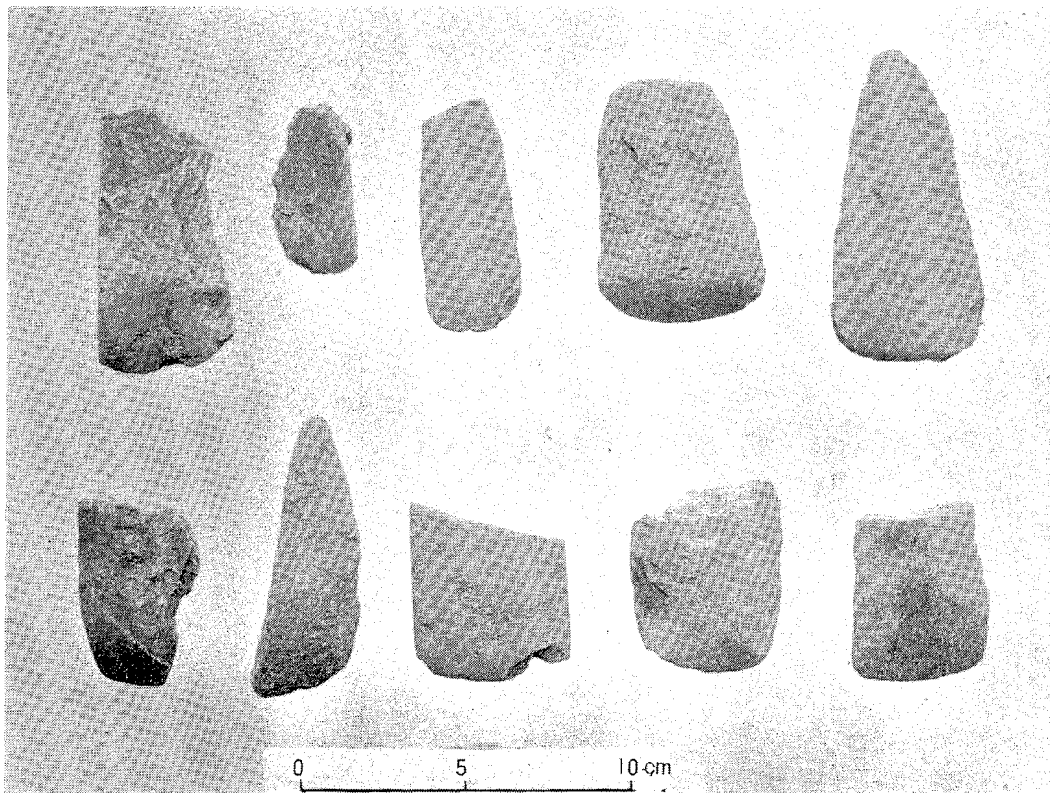
PLATE XI

Stone implements from Shimotabaru area -2

All implements (Figs.1,2) are of hard grayish blue rock.



1

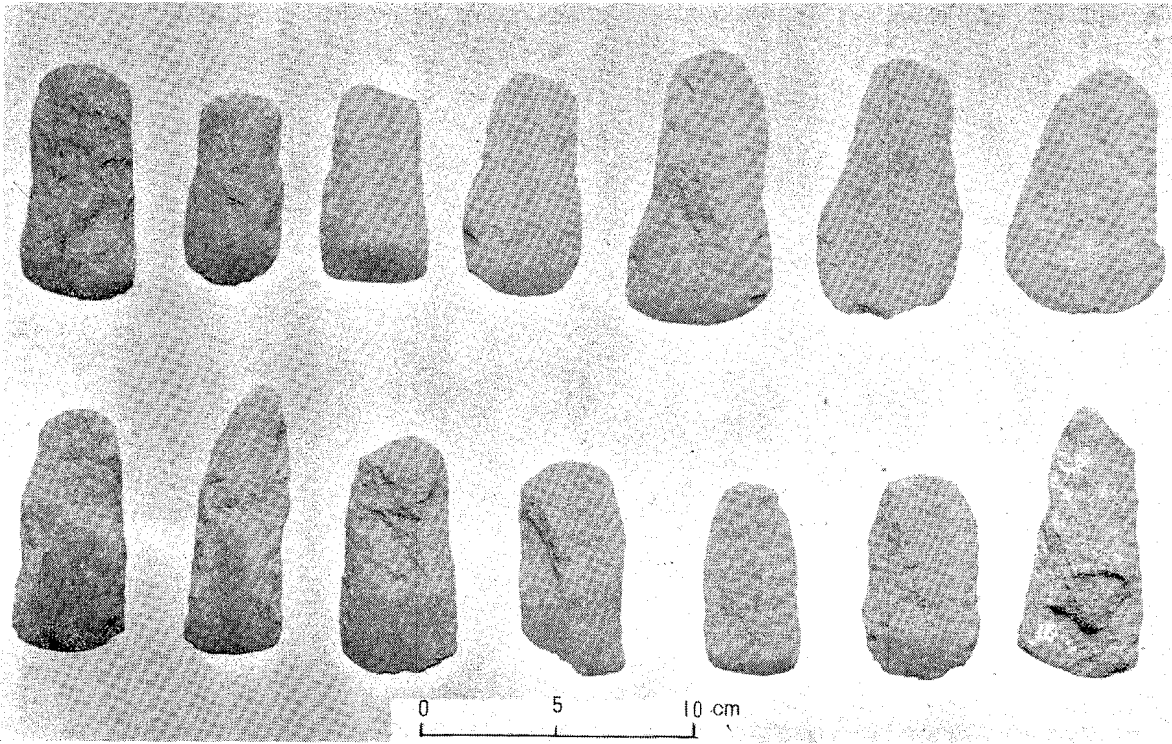


2

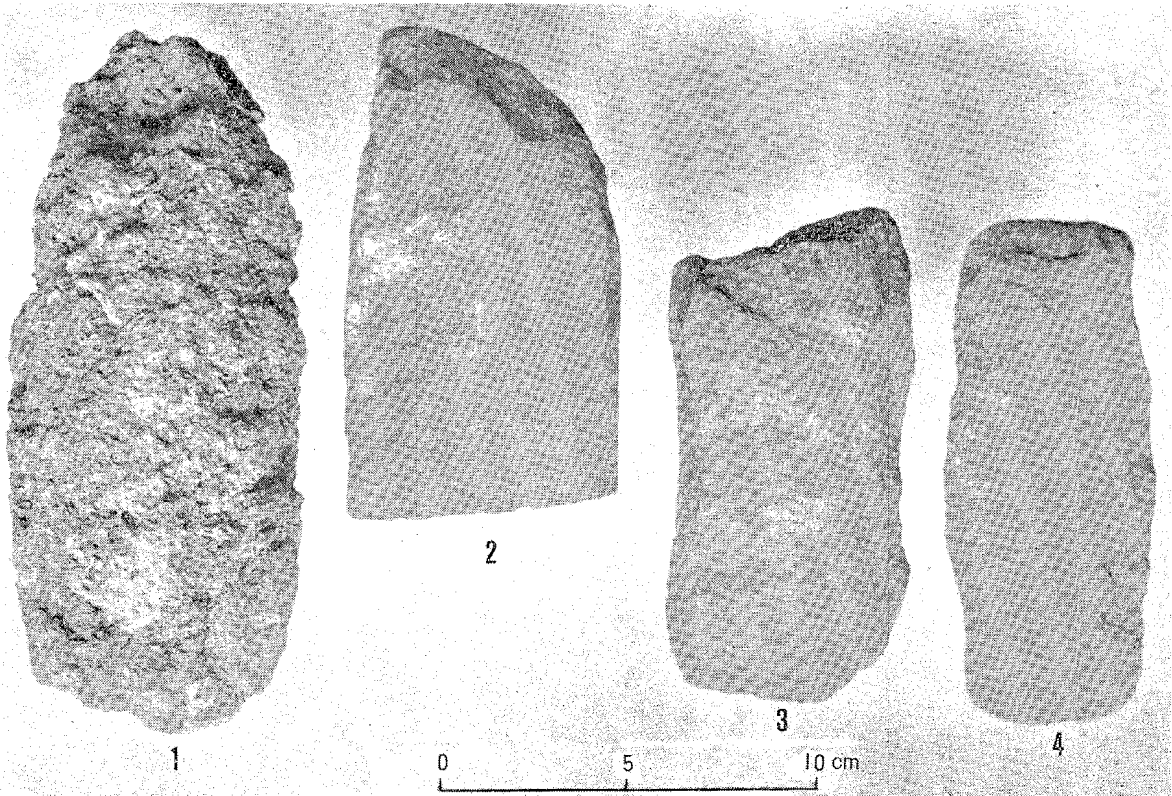
PLATE XII

Stone implements from Shimotabaru and Mae-mura areas -1

- 1 Stone implements from Shimotabaru are of hard grayish blue rock
- 2 Stone implements from Shimotabaru and Mae-mura areas
Stone implements (Nos.1,2,4 Shimotabaru, No.3-Mae-mura),
with exception of the second example (coral), are of hard grayish blue rock,



1



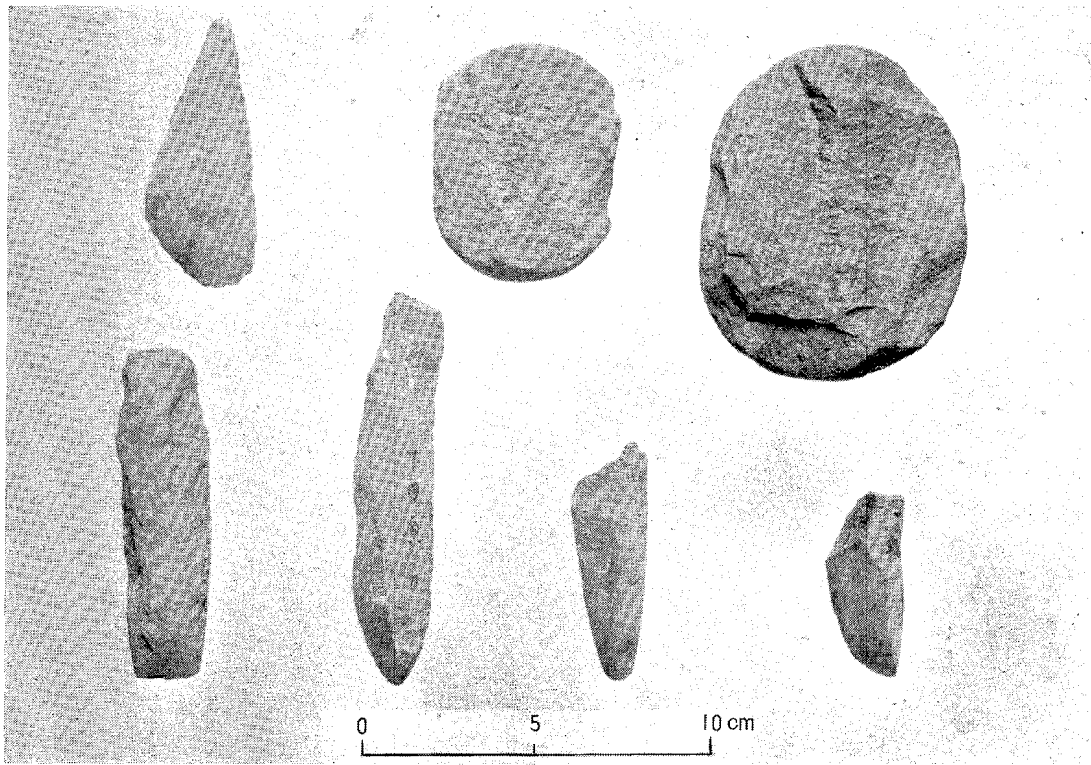
2

PLATE X III

Stone implements from Shimotabaru area -3

All implements (Figs.1,2) are of hard grayish blue rock

PLATE X III



1



2

PLATE X W

Stone implements from Shimotabarū area 4

- 1 Implements made of grayish blue rock
- 2 Flat stones with smoothed surfaces; Implements, with two exceptions of Nos. 1 and 2 (eruptive rock), are of sand stone.

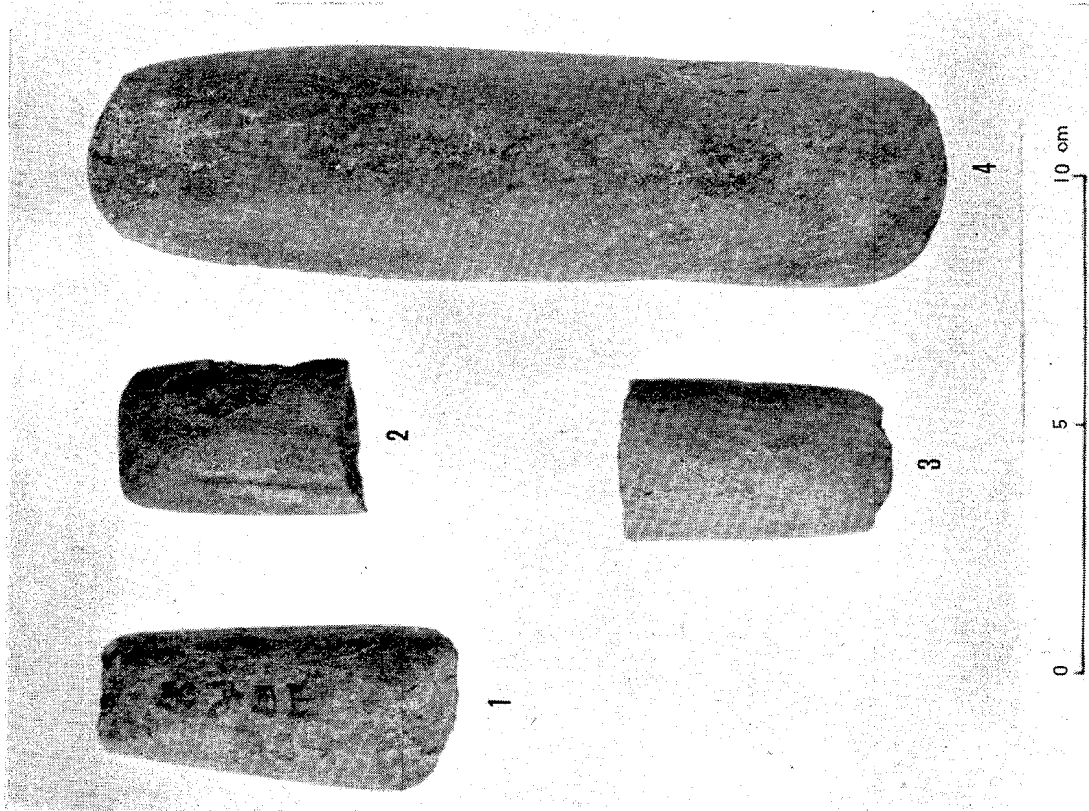
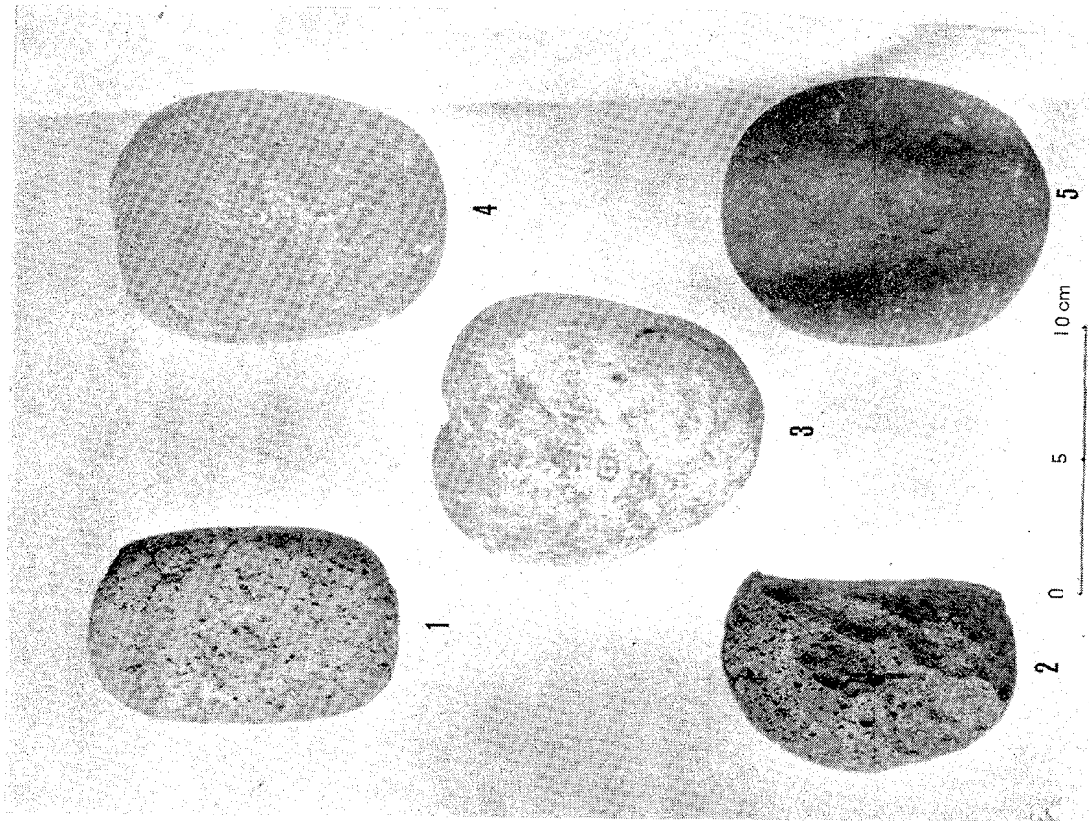


PLATE XV

Stone implement of hard black stone, (a- up side, b- profile, c- back side) exact location unknown, from Hateruma Island in the collection of the Kyushu University Museum, Gyokuseikan



c

b

a

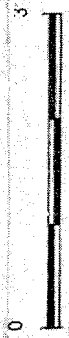


PLATE X VI

Stoneimplements from excavated trenches- 1

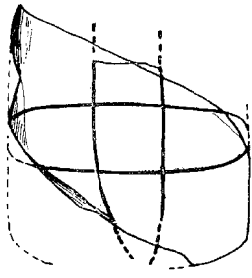
1, 5, 7 Stone implements from the second dark brown soil

2, 4, 9 Stone implements from the black soil

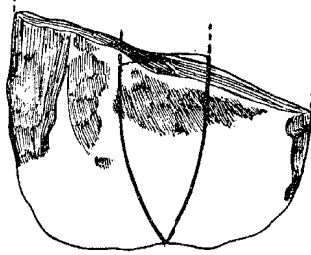
3, 6, 8, 10, 11 Stone implements from the third soil deposit containing shells

implements, with exceptions of No.1 (eruptive rock) and Nos. 7,8 (slate) , are of hard grayish blue rock.

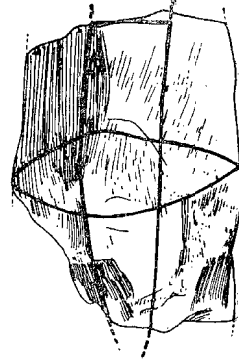
PLATE X VI



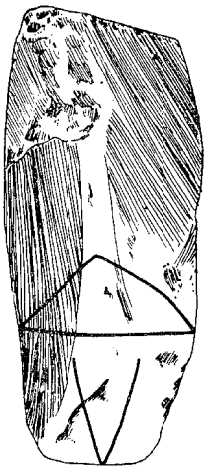
1



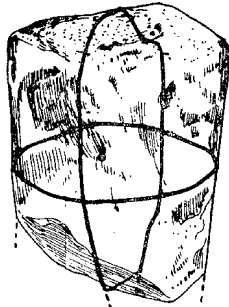
4



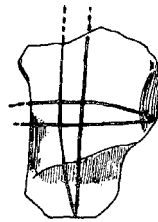
9



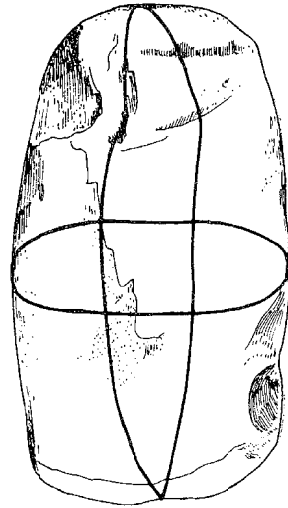
2



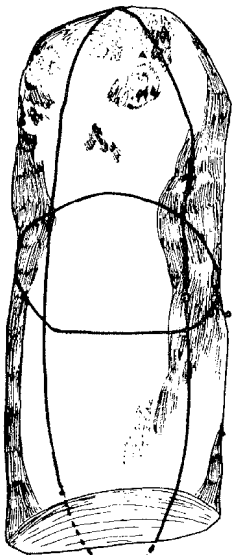
5



7



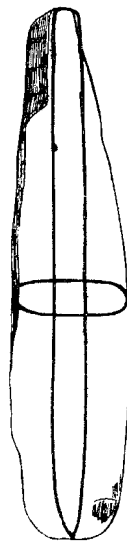
10



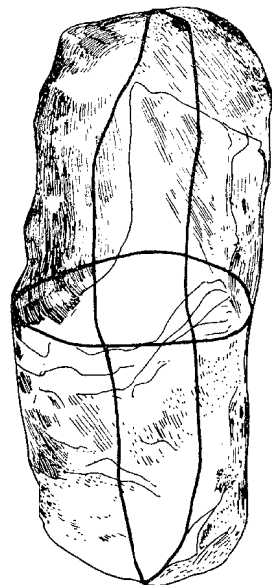
3



6



8



11



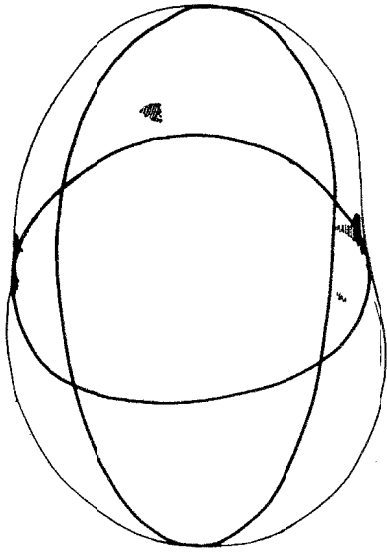
PLATE XVI

Stone implements from excavated trenches- 2

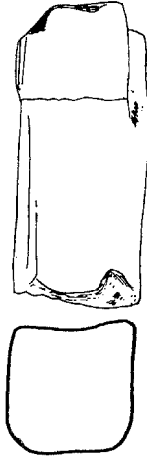
1~5 Stone implements from the third soil deposit containing shells

All the implements, with exception of Nos. 1,2 (coral stone) are of sand stone.

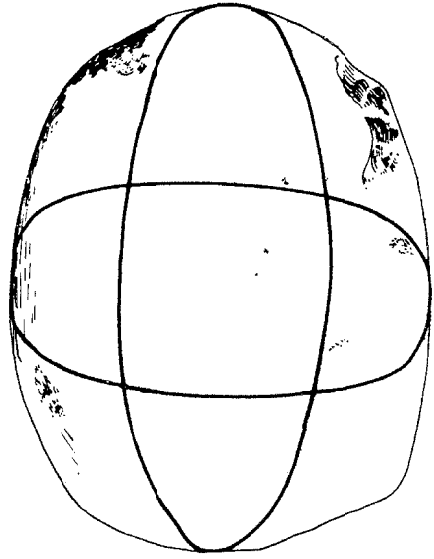
PLATE XVII



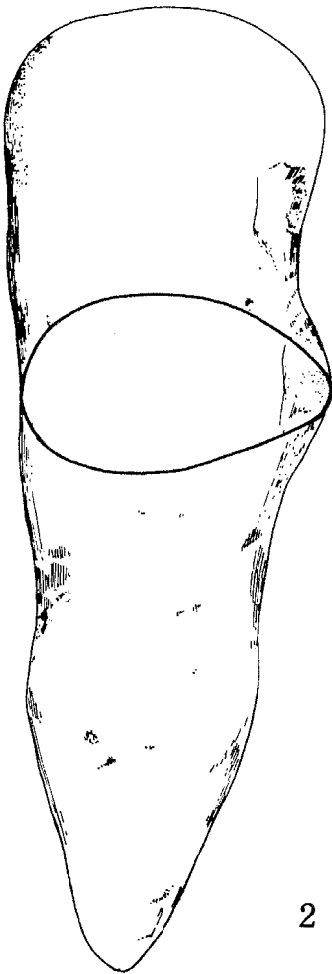
1



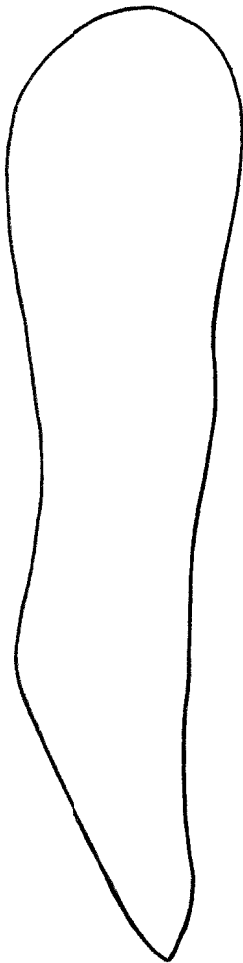
3



4



2



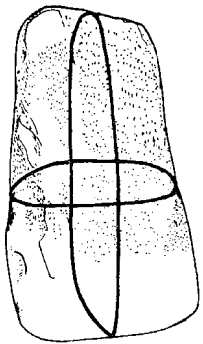
5



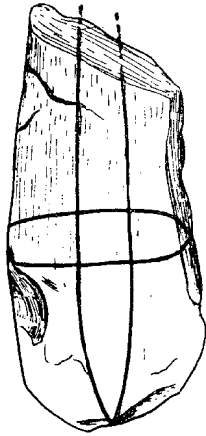
PLATE XVIII

Stone implements from Shimotabaru area- 5

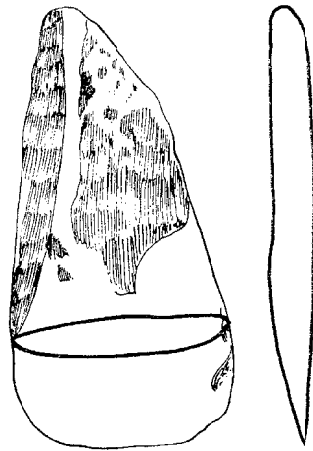
All the implements are of hard grayish blue rock.



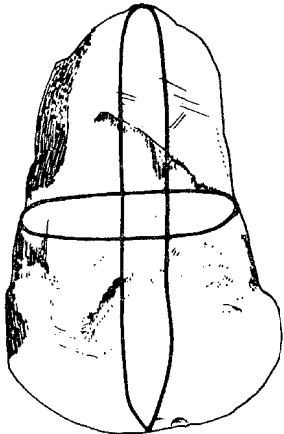
1



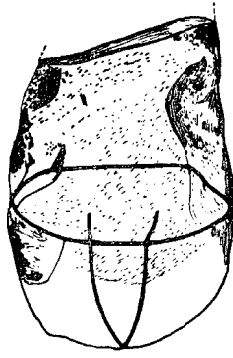
4



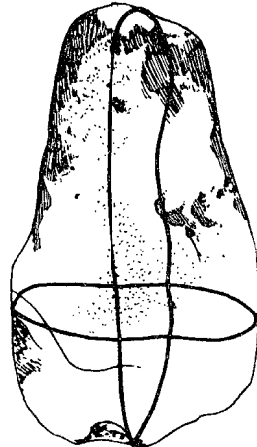
7



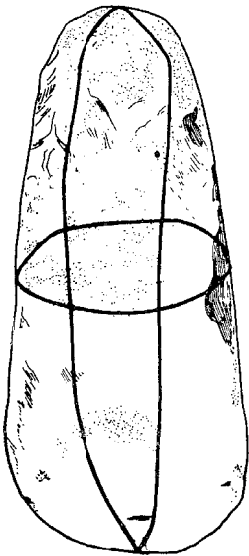
2



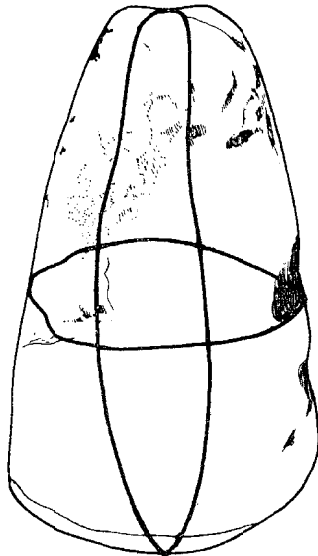
5



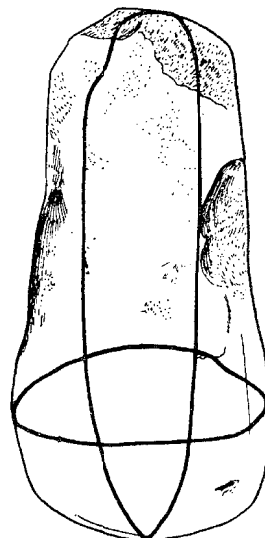
8



3



6



9

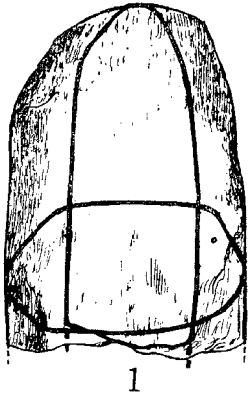


PLATE X IX

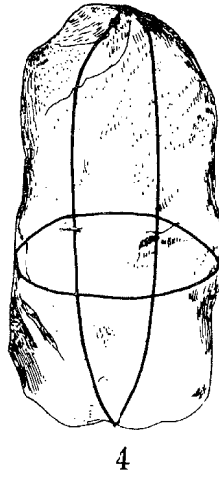
Stone implements from Shimotabaru area- 6

All the implements are of hard grayish blue rock.

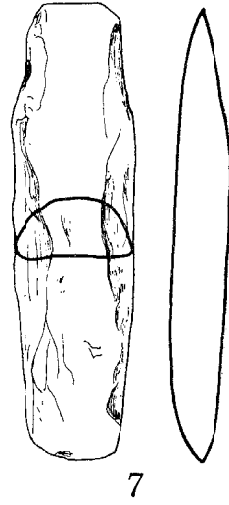
PLATE XIX



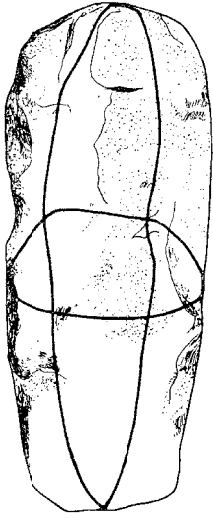
1



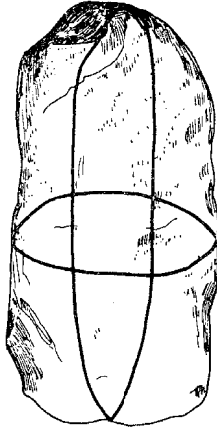
4



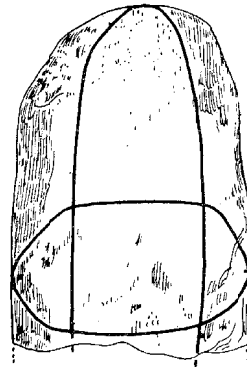
7



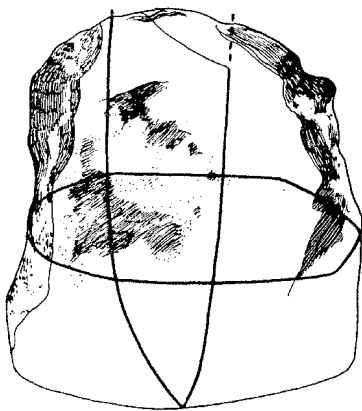
2



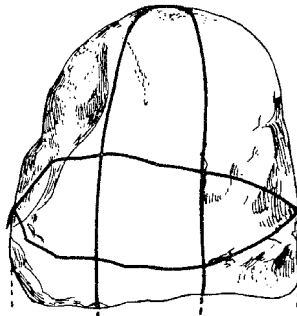
5



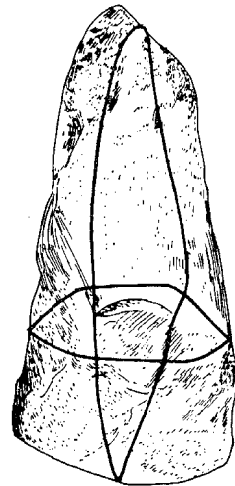
8



3



6



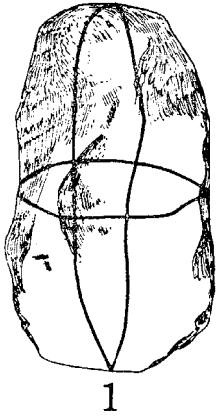
9



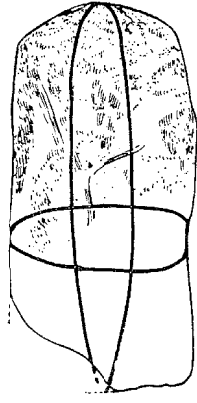
PLATE XX

Stone implements from Shimotabaru area- 7

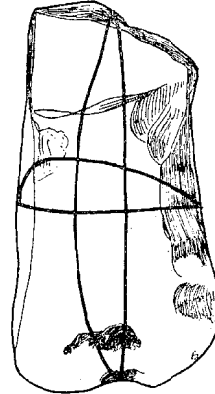
All the implements are of hard grayish blue rock.



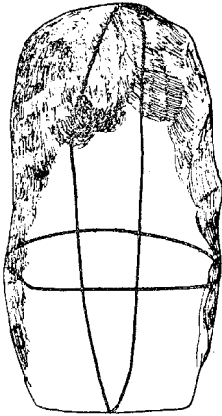
1



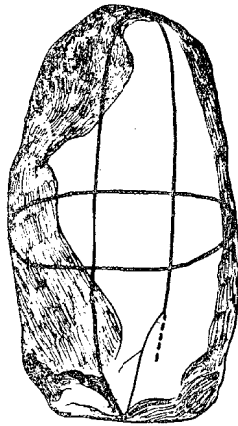
4



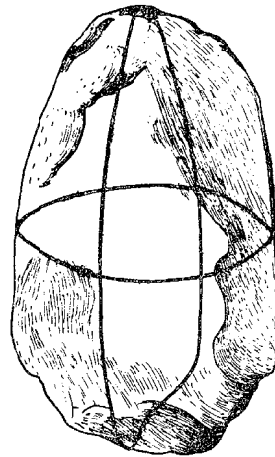
7



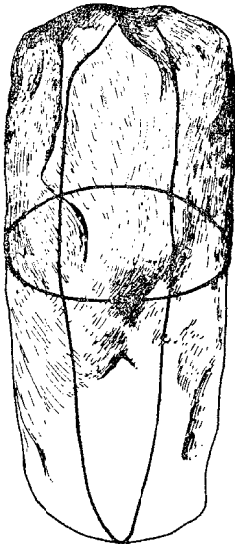
2



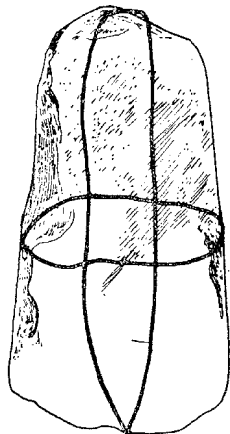
5



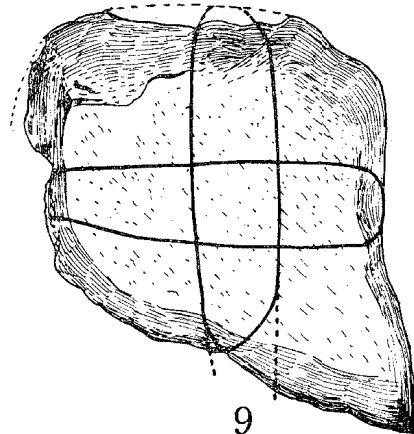
8



3



6



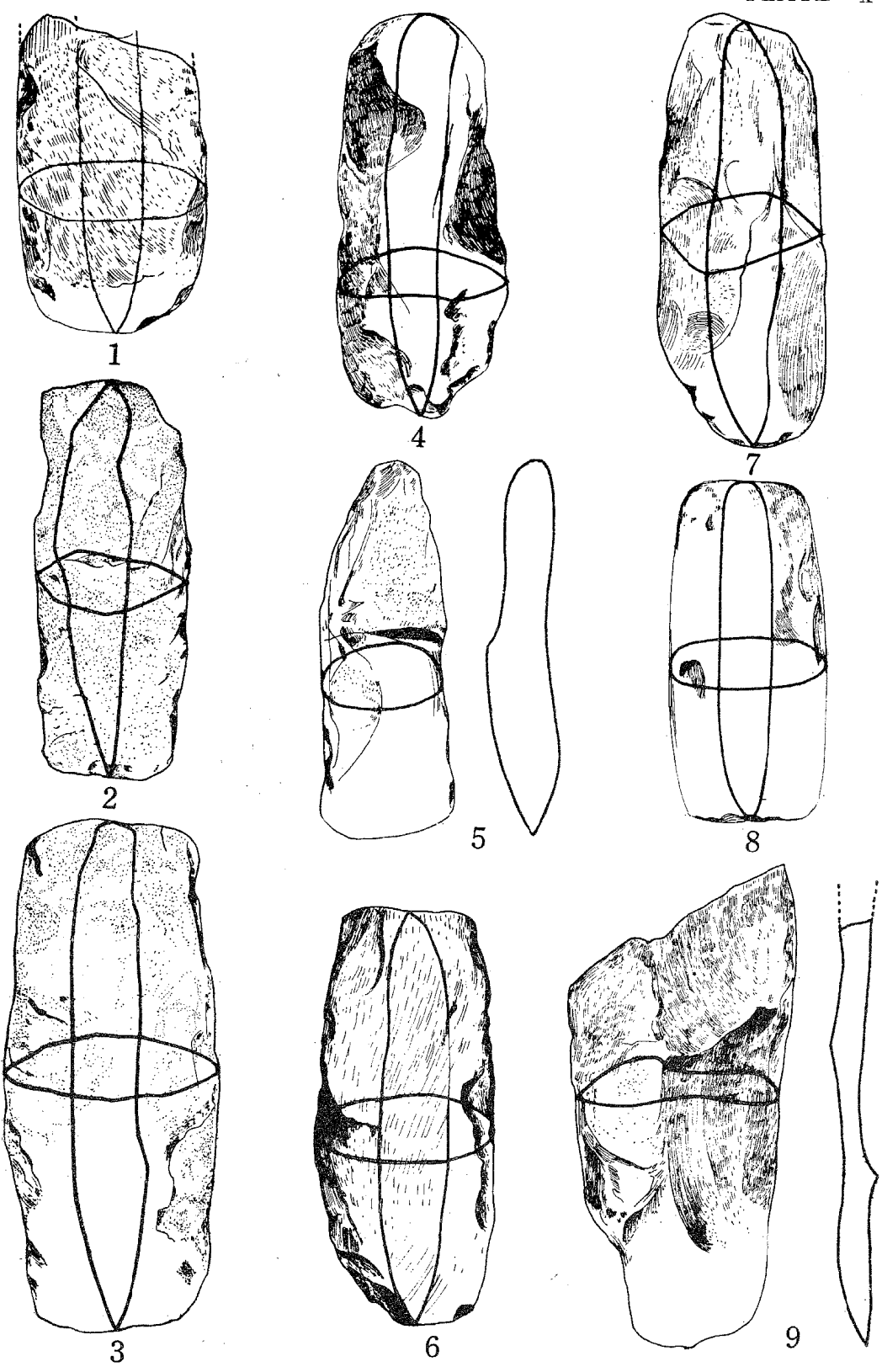
9



PLATE XII

Stone implements from Shimotabaru area-8

All the implements are of hard grayish blue rock.

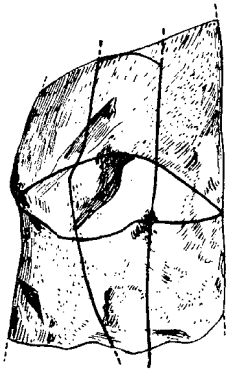


0 5 cm

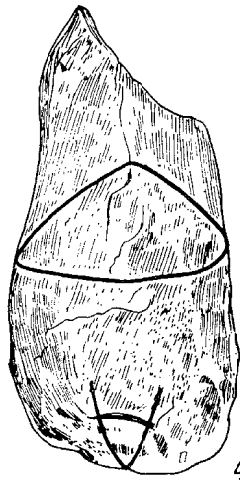
PLATE X XI

Stone implements from Shimotabaru area-9

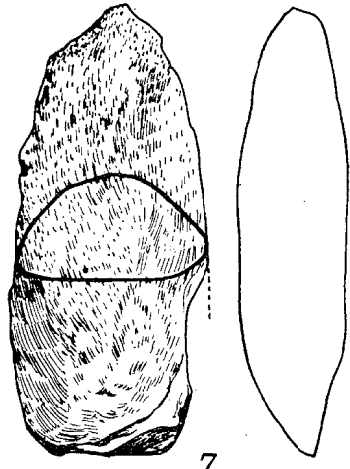
All the implements are of hard grayish blue rock.



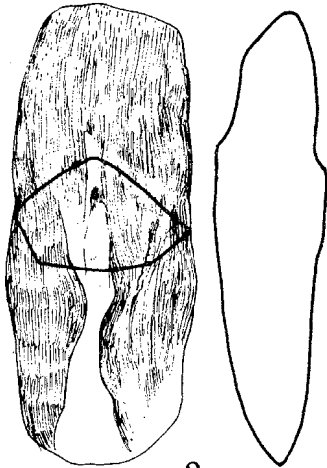
1



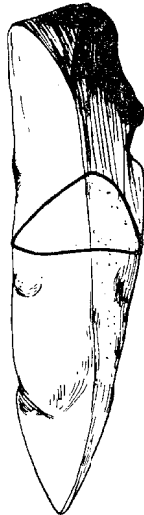
4



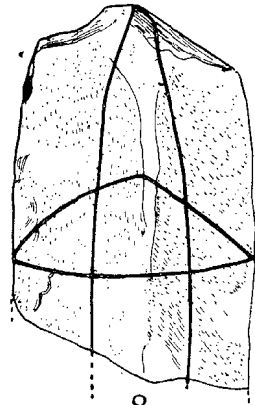
7



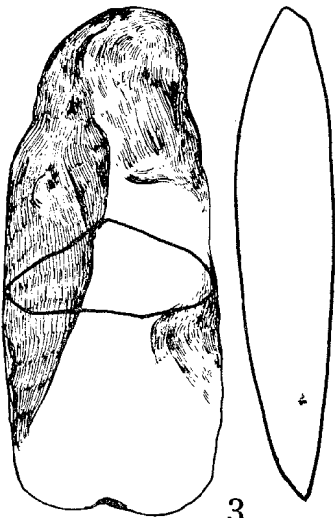
2



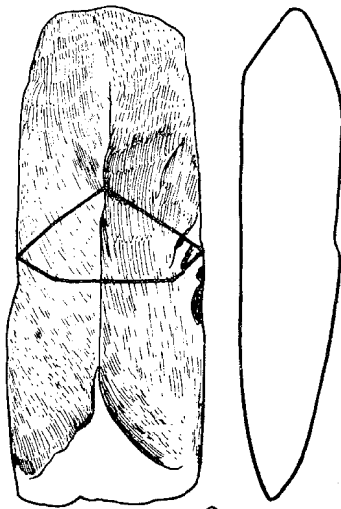
5



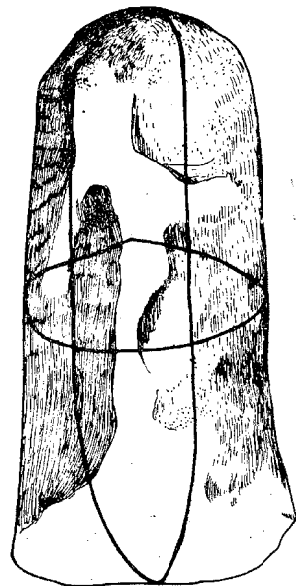
8



3



6



9

0 5 cm



PLATE XXIII

Stone implements from Shimotadaru and Maemura areas- 2

1-3, 5-8 Stone implements from Shimotadaru

4 // from Mae-mura

All the implements are of hard grayish blue rock.

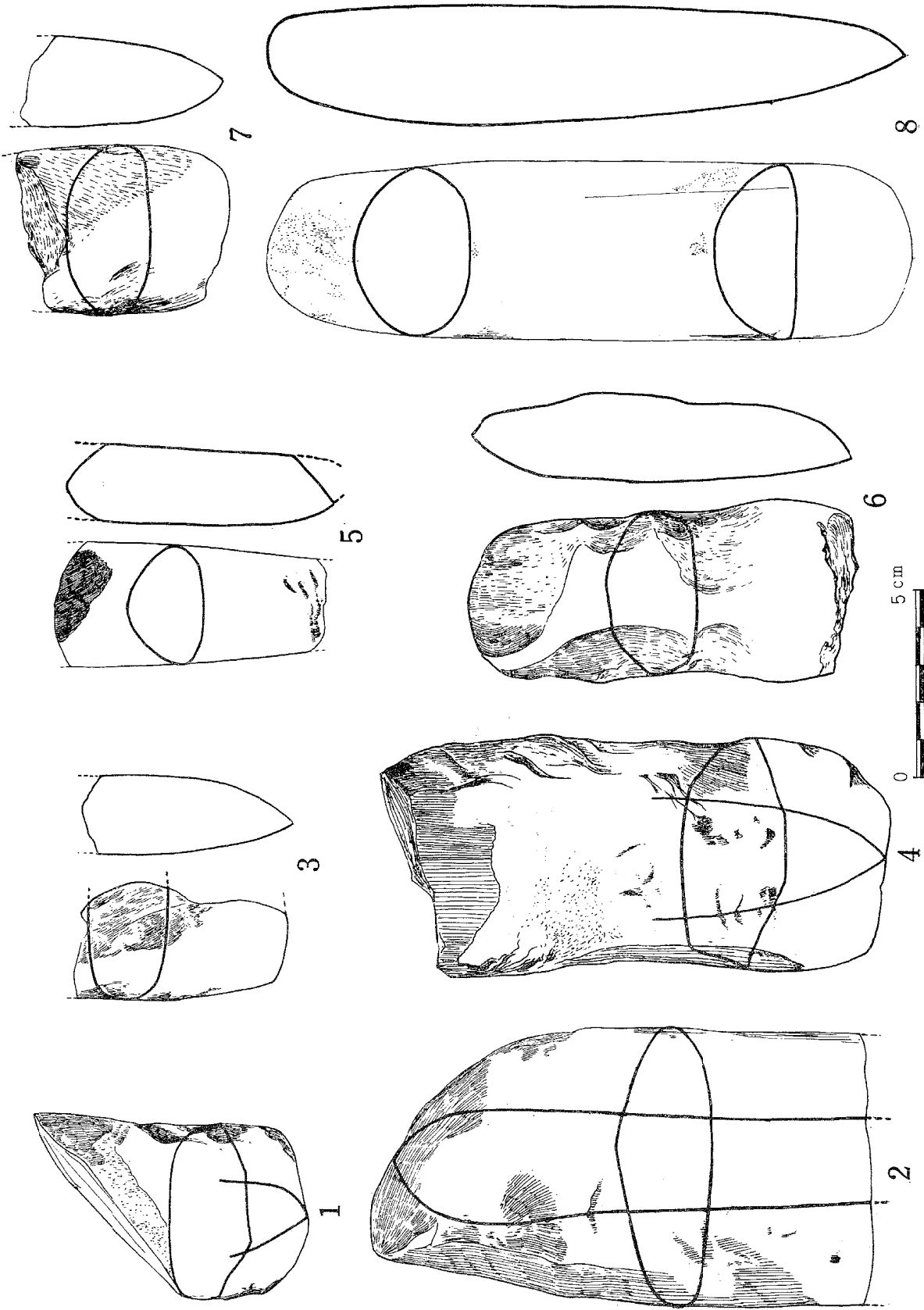
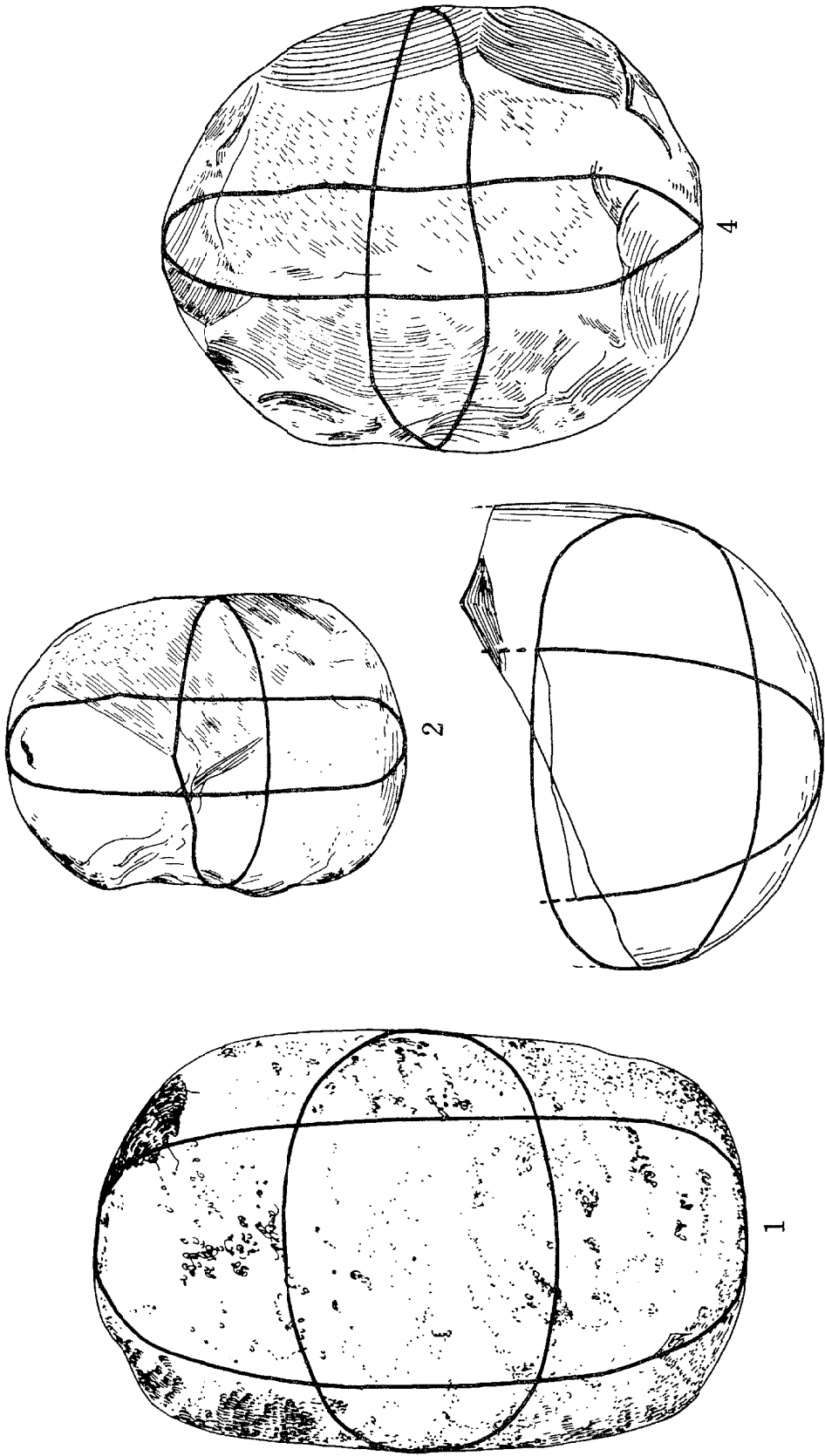


PLATE XXIV

Stone implements from Shimotabaru area- 10

implements, with exceptions of No.1 (eruptive rock) and No.3 (sand stone),
are of hard grayish blue rock.



0 5 cm

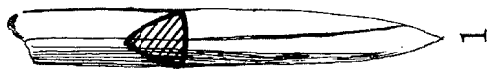
PLATE XXV

Small objects in stone and bone from Shimotabarū trenches

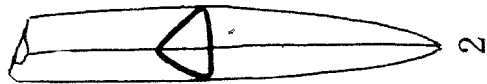
1, 2, 8, 9 Slate needles and slate implements with cutting edge

3, 6, 7 Bone needles from shell layer

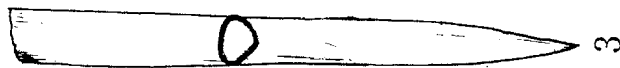
4, 5 Objects made of fang of boar from the bottom of shell layer



1



2



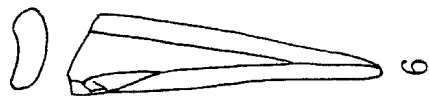
3



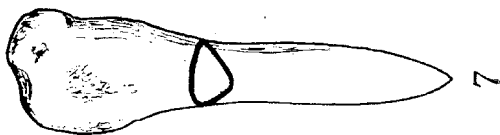
4



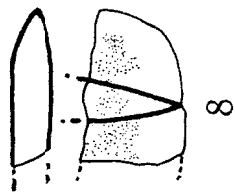
5



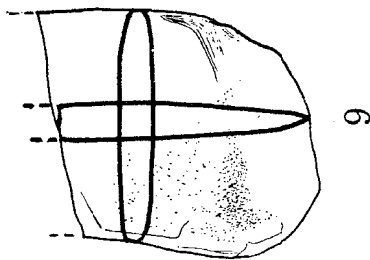
6



7



8



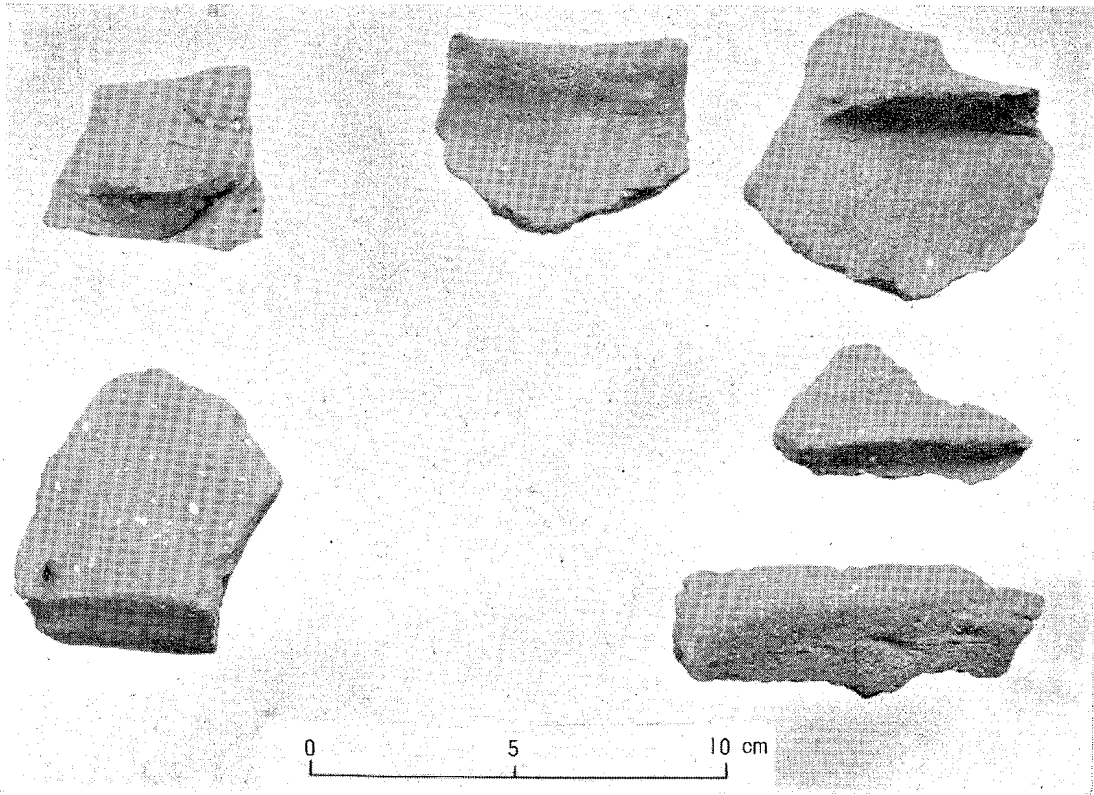
9



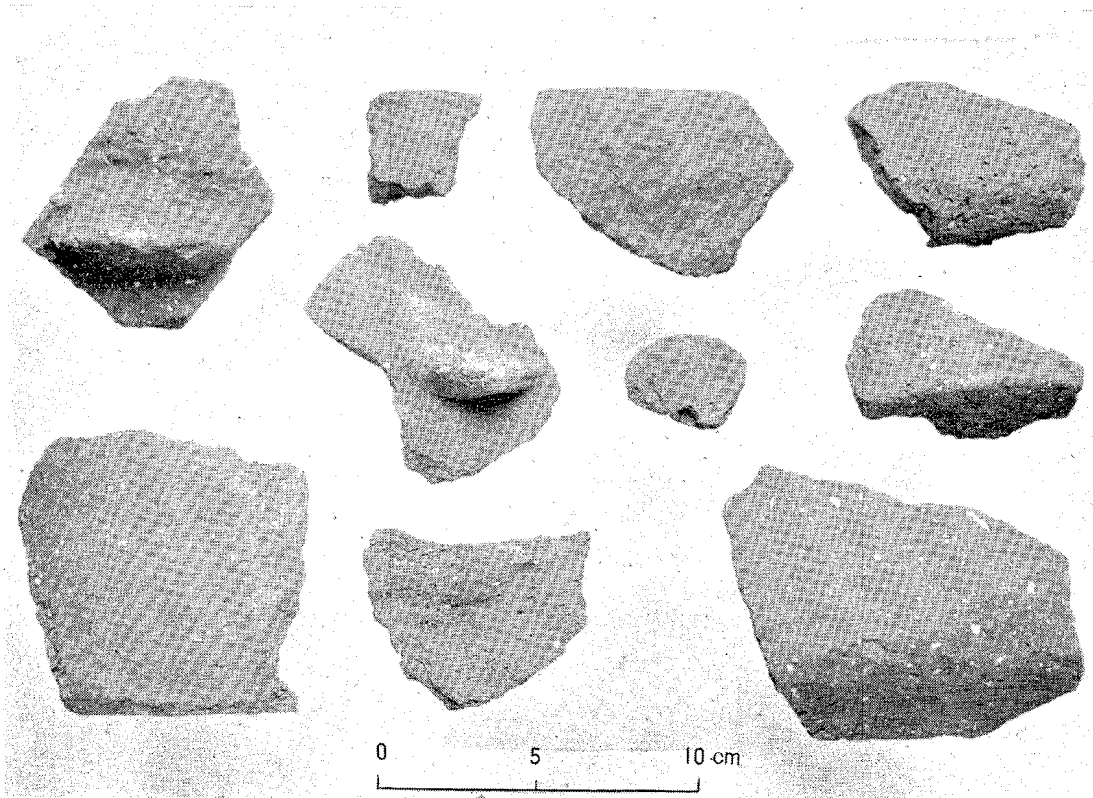
PLATE XXVI

Fragments of Panari type pottery from Hateruma

- 1 Fragments from the Futabaru-wah site
- 2 Fragments from Keishibaru



1

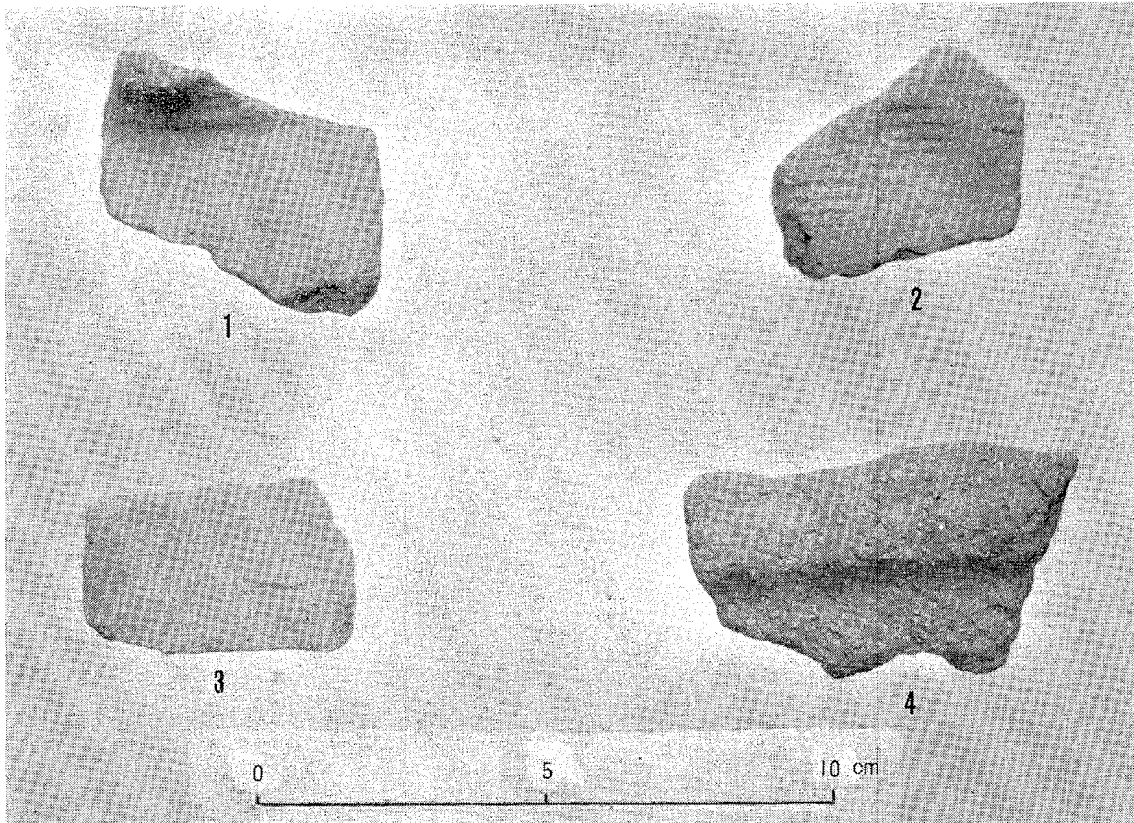


2

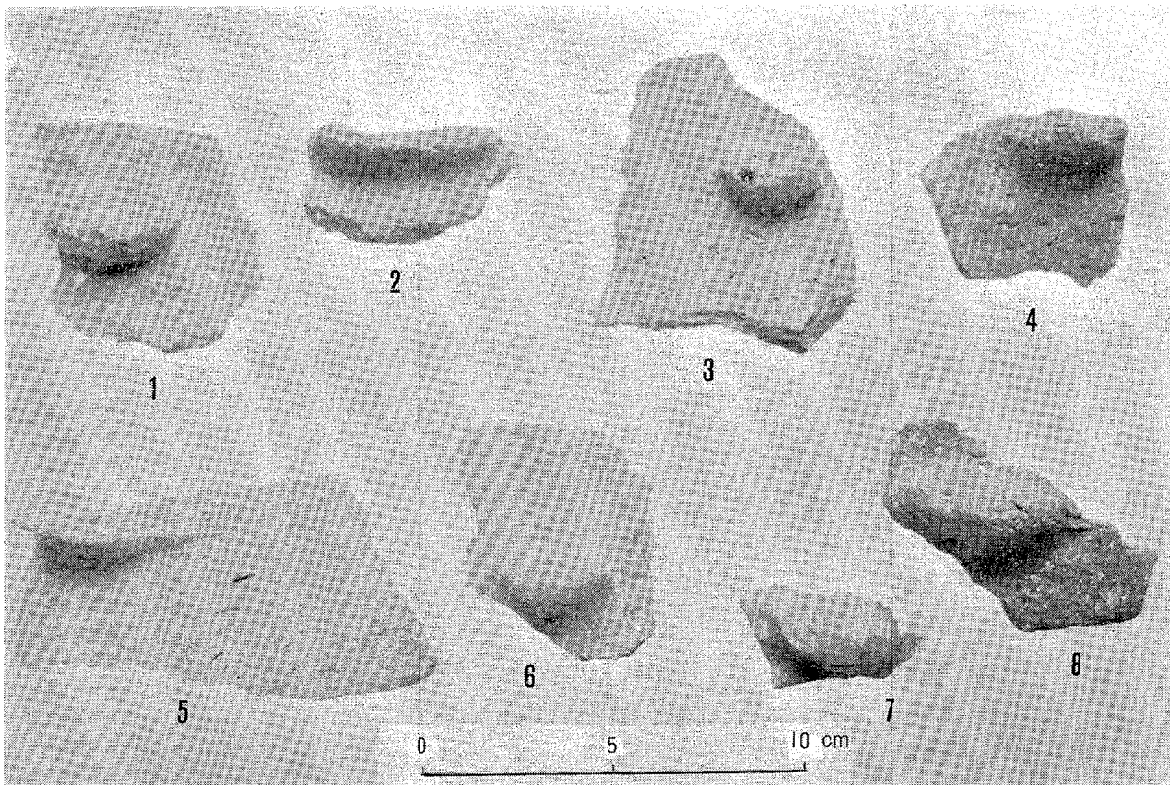
PLATE XXVI

Pottery wares from Hateruma

- 1 Blackish wares and brown pottery
- 1 Blackish ware without stamped pattern from Shimotabaru
- 2 Blackish ware without stamped pattern from Misato
- 3 Blackish ware with stamped pattern from Shimotabaru
- 4 Brown pottery with wavy rim and mouth lip from the Futabaru-wah site
- 2 Panary type pottery from Hateruma
- 1, 2 Potsherds from Naishi-mura site
- 3, 4 8 Potsherds from the Futamoris' land
- 5, 6 Potsherds from Mizato-mura
- 7 Potsherds from Premises site of Akahachi



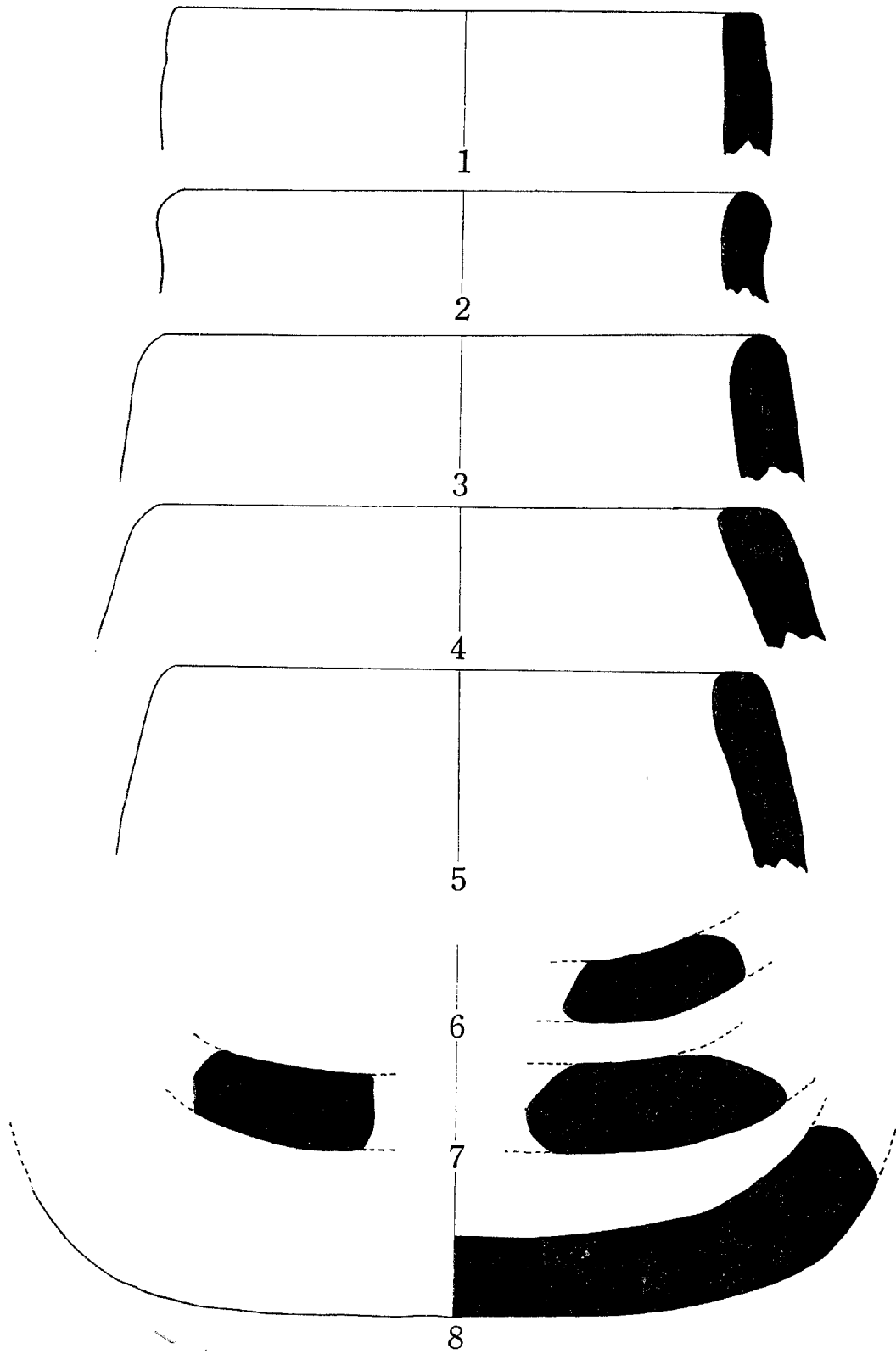
1



2

PLATE XXVIII

Potsherds from excavated trenches

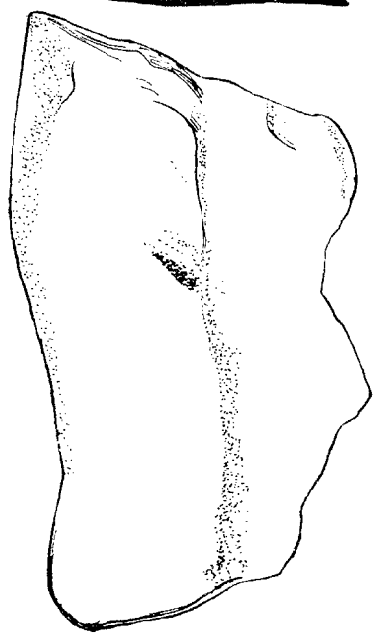


0 5 cm

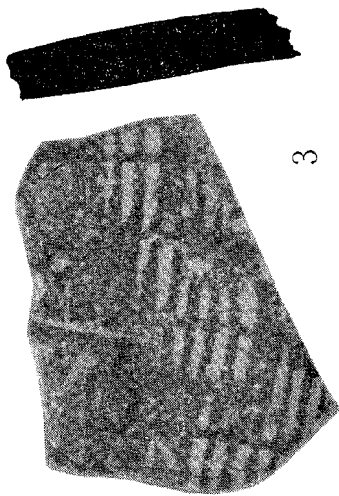
PLATE XXIX

Pottery wares from Hateruma and Formosa

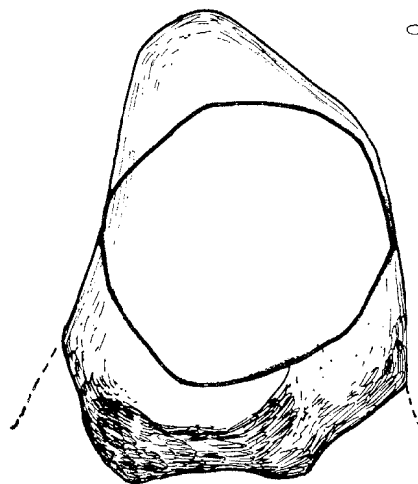
- 1 Rim part of the vessel from Miyazato
- 2 Handle part from Shimotabaru
- 3 Fragment of grayish black ware with stamped pattern from Shimotabaru
- 4 Fragment of grayish brown ware with stamped pattern from Enri shell mound, northern Formosa



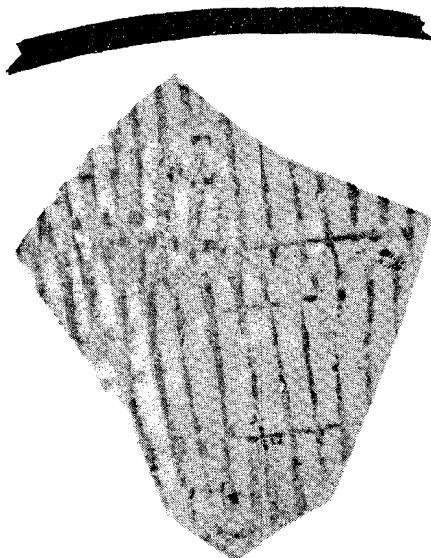
1



3



2



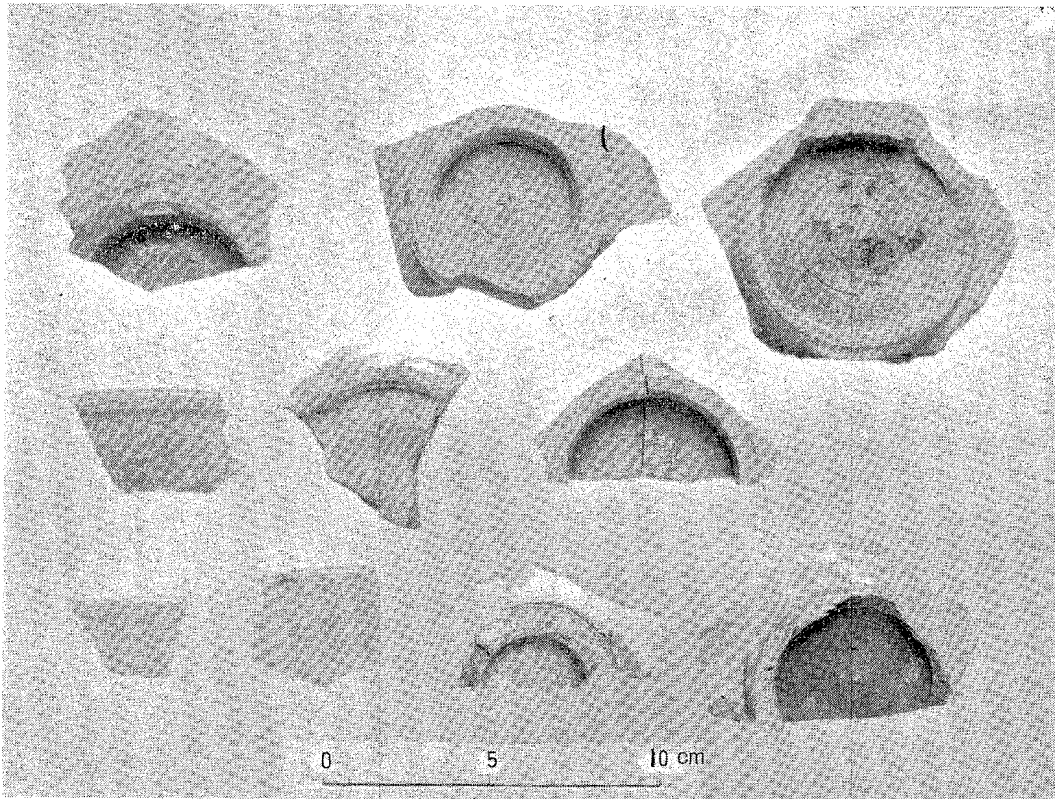
4



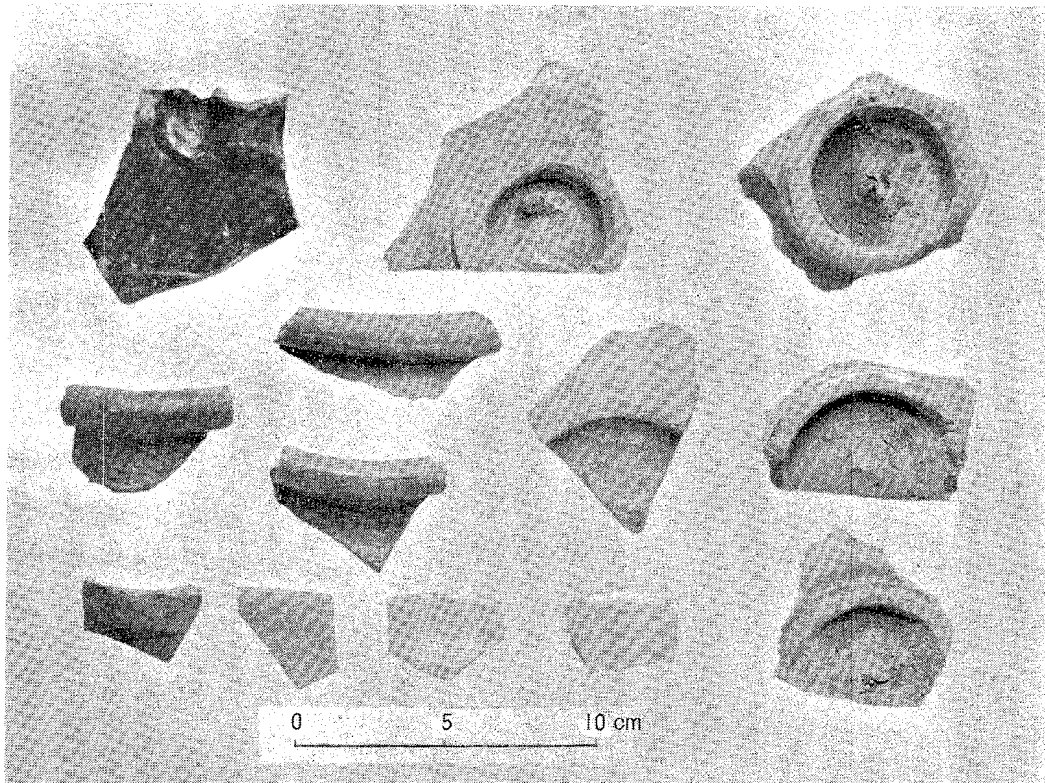
PLATE XXX

Chinese wares from Hateruma-1

- 1 Fragments of Chinese celadon from Keishibaru
- 2 Fragments of Chinese ware with brown glaze and celadon from Naishi-mura site



1

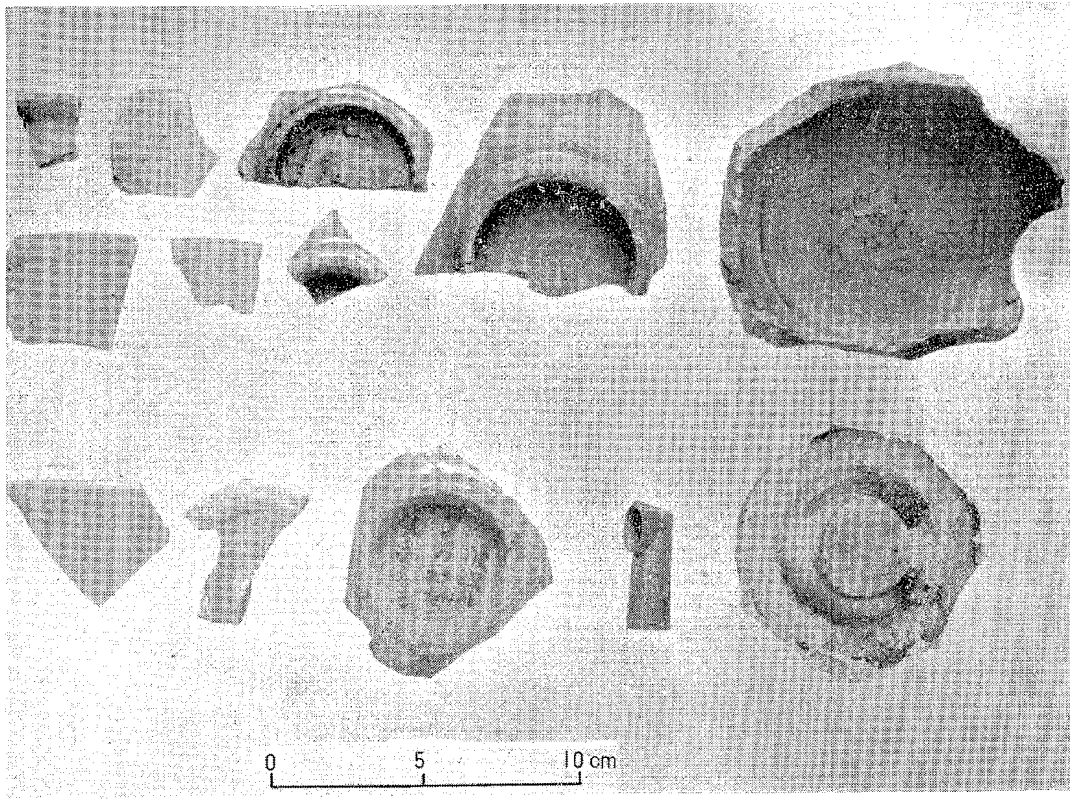


2

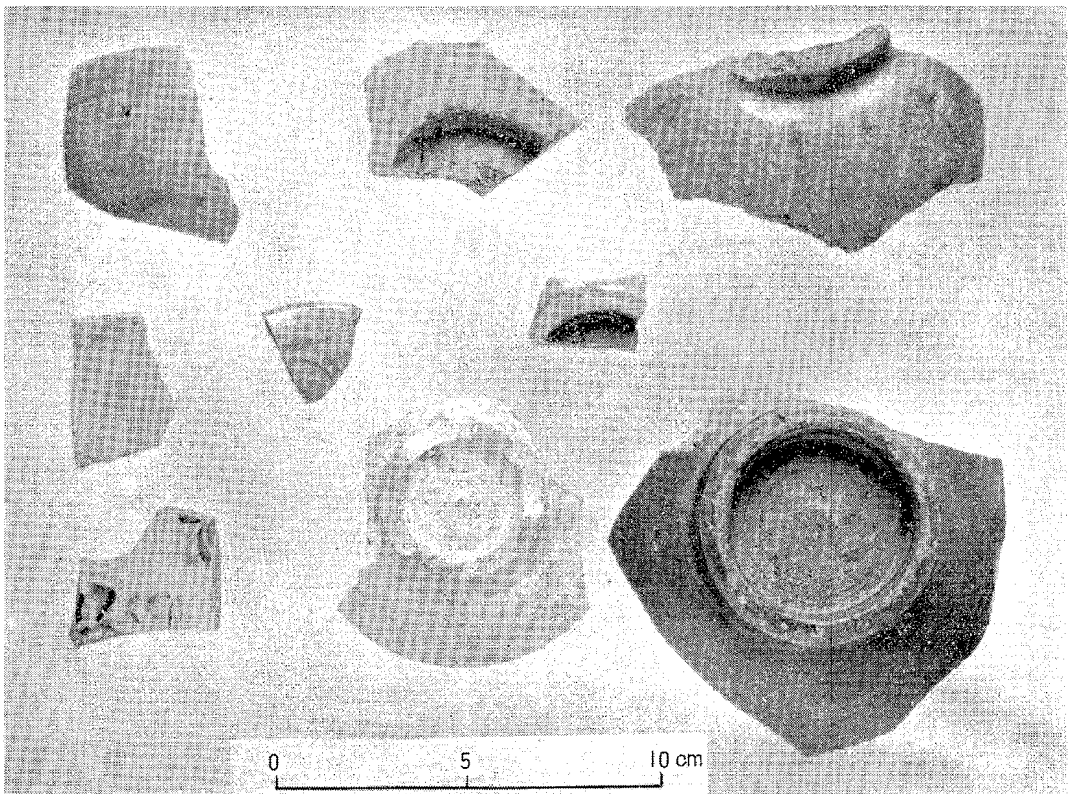
PLATE XXXI

Chinese wares from Hateruma-2

- 1 Fragments of Chinese celadon and a pipe from Misuku-wah site
- 2 Fragments of Chinese celadon and blue and white China from Futabar-wah site



1



2

PLATE XXII

Shells from Shimotabaru trenches- 1

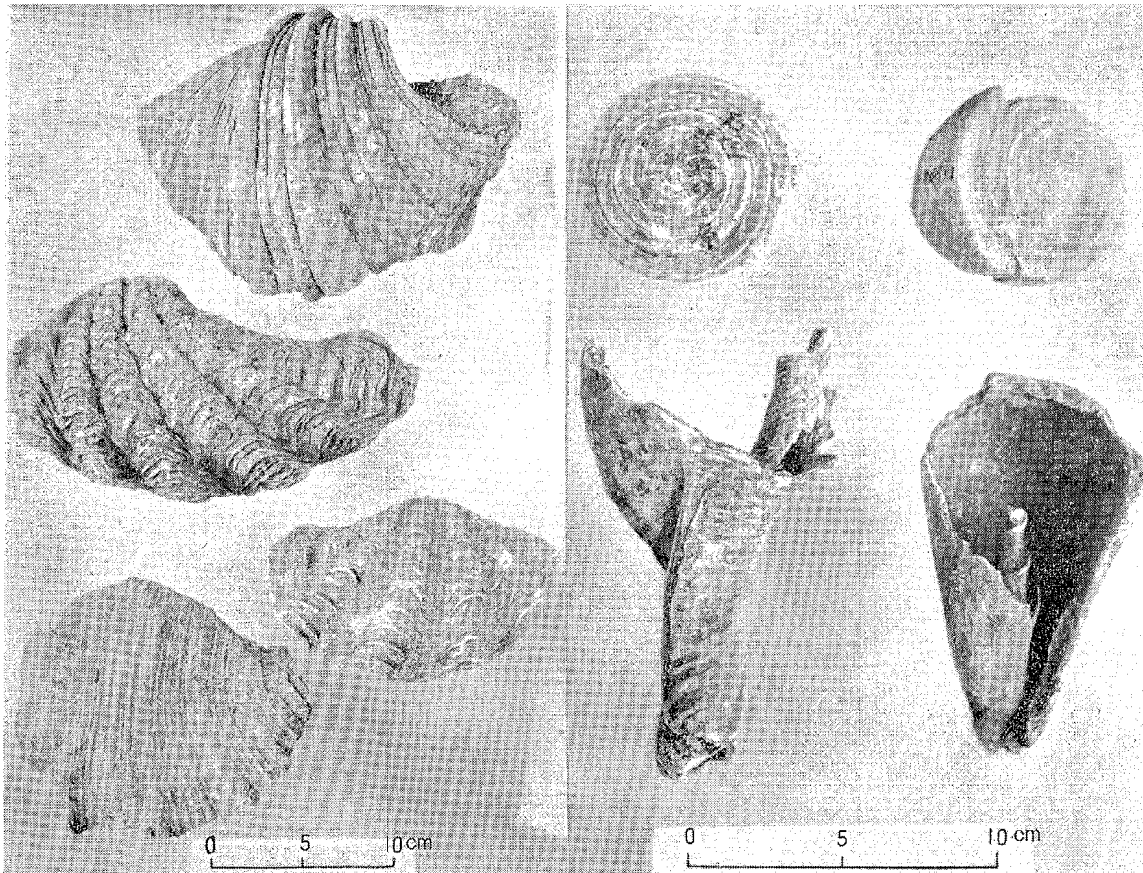
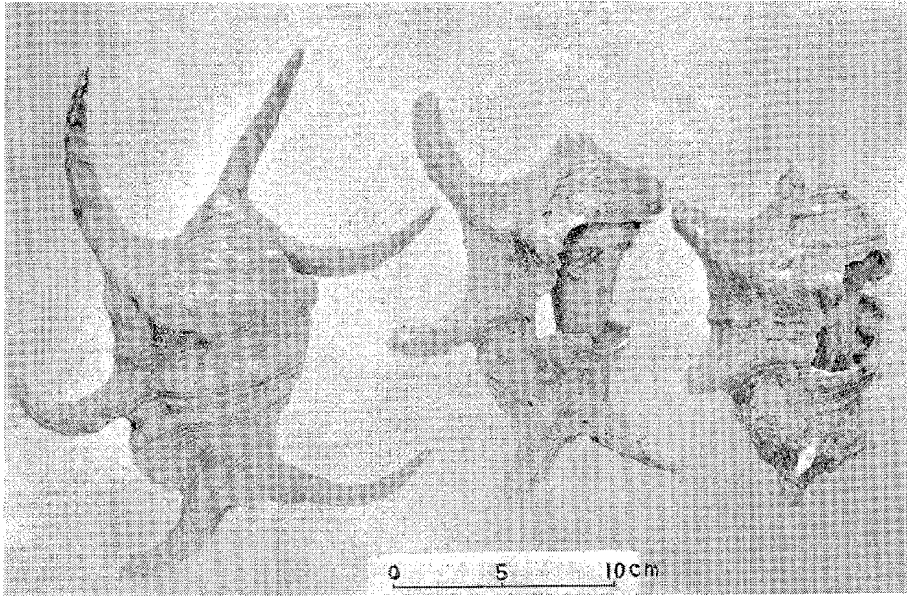


PLATE XXXIII

Shells from Shimotabaru trenches- 2

PLATE XXXIII

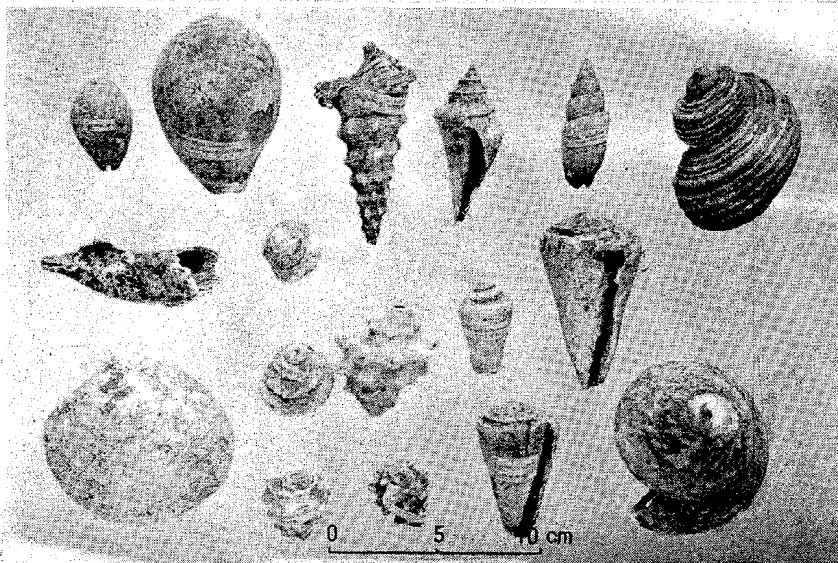
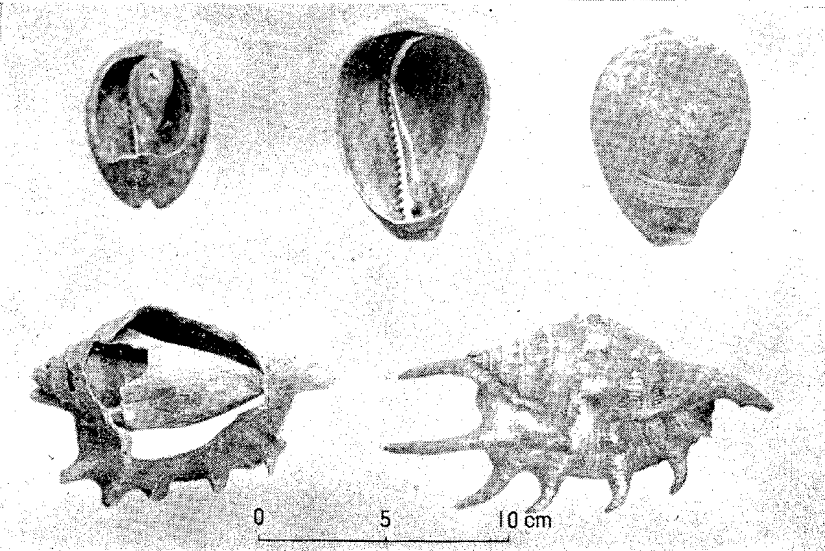
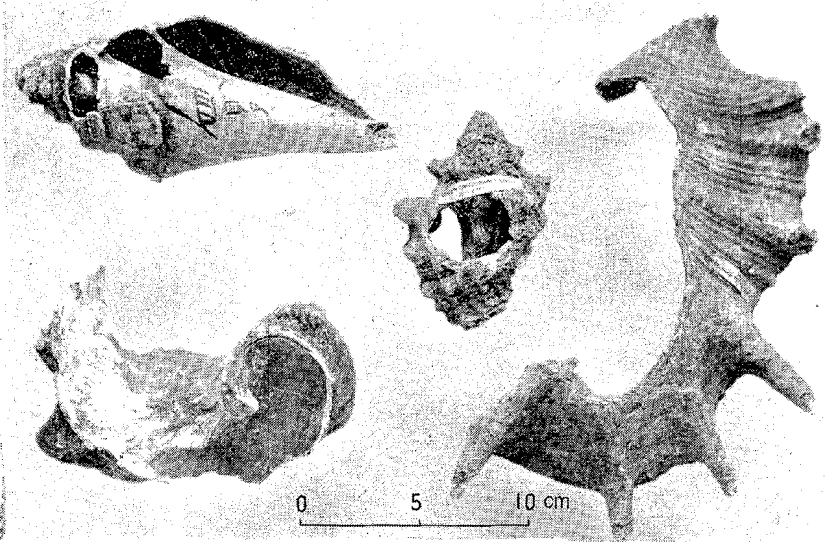


PLATE XXXIV

Shells from Shimotabarū trenches- 5

PLATE XXXIV

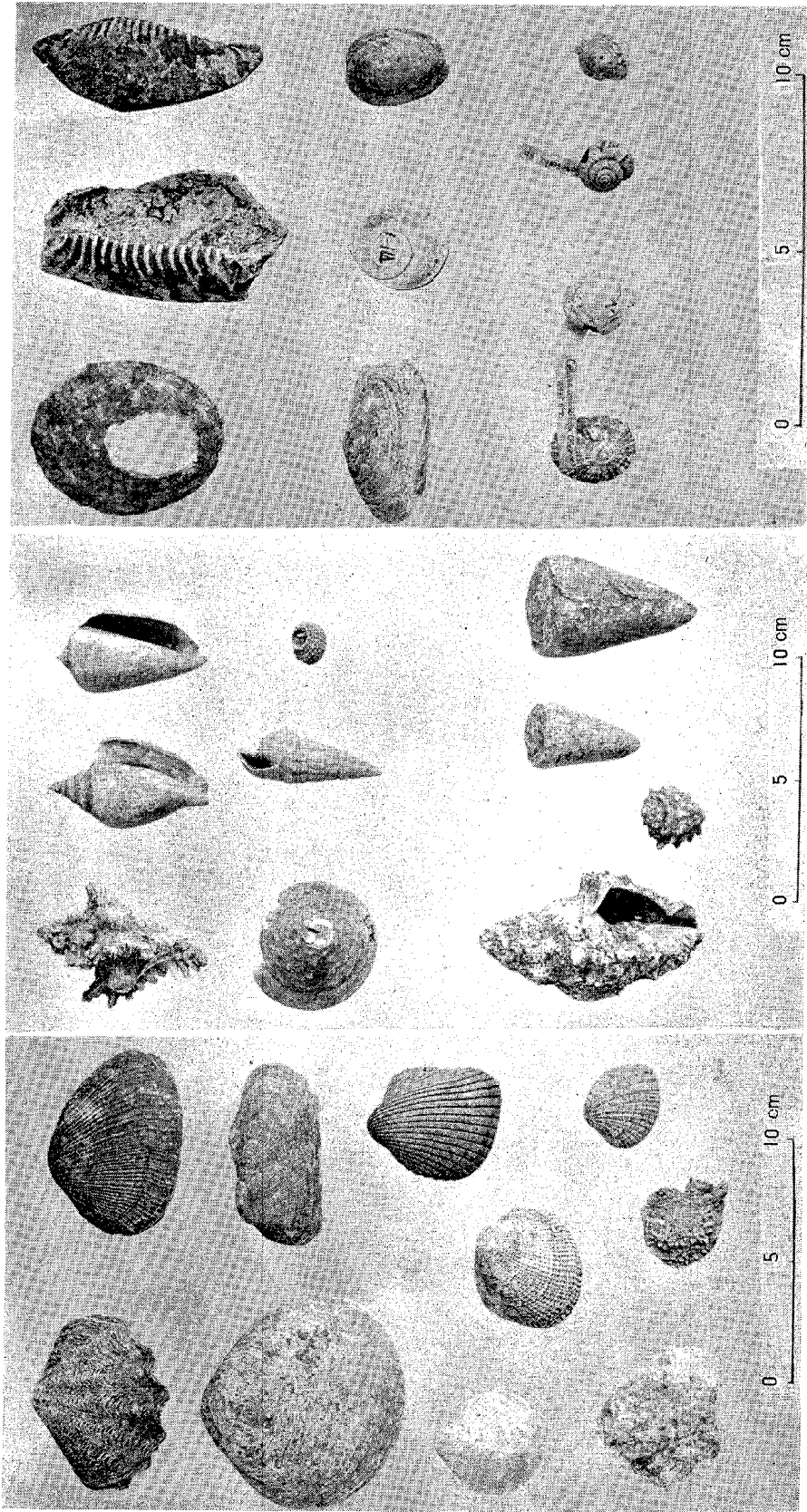
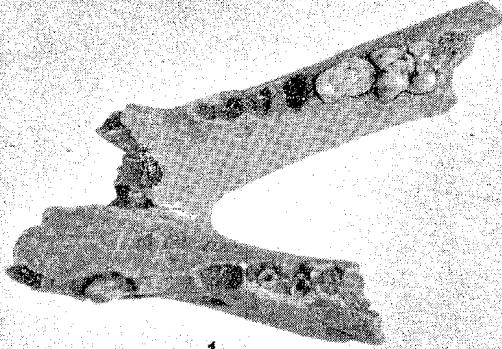


PLATE XXXV

Sus scrofa leucomystax T. & S. (wild boar)-1

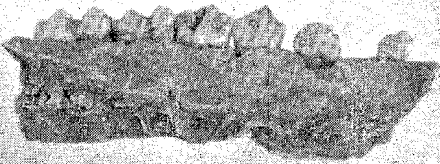
- 1 Mandibula
- 2 A part of parietal and occipital bones
- 3 Maxilla, right, interior view
- 4-6 Mandibula, exterior view
- 7 Mandibulae canine, left
- 8 Mandibulae canine, right



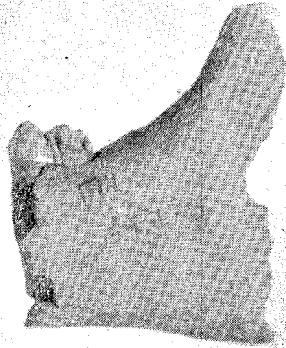
1



2



3



4



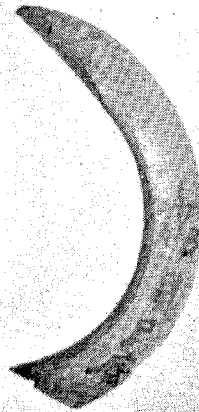
5



6



7



8



PLATE XXXVI

Sus scrofa leucomystax T. & S. (wild boar)-2

- 1 a Proximal part of scapula, left, exterior view
b Distal part of scapula, right, exterior view
c Proximal part of scapula, right, exterior view
d Proximal part of ulna, right, interior view
a Distal part of radius, left
- 2 Fragments of extremity bones
Fragments of humerus, radius and tibia are seen in the uppermost row.
- 3 b Os ischii, left
c Proximal part of femur, right
d Distal part of femur, left
a Tibia, left
b Calcaneus, left
- 4 a Costae
b Ossa metacarpalia
c Phalanges

